

ダンガンロンパ4～絶望 学園とコロシアイ監獄 ～

ダンガンロンパ4作者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

希望ヶ峰学園の春休み。相変わらず殺し屋として活躍中の烏岳紫苑は突然、『才囚学園』という学校に飛ばされる。

モノクマから伝えられるのは…『最後のロシアアイ』。

烏岳紫苑は希望を見捨てずに生きることができるか?!

【登場人物】

《アイランド編メンバー》

烏岳紫苑 「超高校級の殺し屋」

葭原茉莉花 「超高校級の画家」

木菟星汰 「超高校級の陰陽師」

日向創 「超高校級の???」

七海千秋 「超高校級のゲーマー」

狛枝風斗 「超高校級の幸運」

花村輝々 「超高校級の料理人」

十神白夜(弟) 「超高校級の御曹司」

※ここでは(兄)、(弟)となります。

小泉真昼 「超高校級の写真家」

西園寺日寄子 「超高校級の日本舞踊家」

式大猫丸 「超高校級のマネージャー」

終里赤音 「超高校級の体操部」

罪木蜜柑 「超高校級の保健委員」

澁田唯吹 「超高校級の軽音楽部」

九頭龍冬彦 「超高校級の極道」

辺古山ペコ 「超高校級の剣道家」

ソニア 「超高校級の王女」

田中眼蛇夢 「超高校級の飼育委員」

左右田和一 「超高校級のメカニック」

《シエアハウス編メンバー》

烏岳紅葉 「超高校級のなんでも屋」

野木崎由李 「超高校級のぶりっ子」

苗木誠 「超高校級の幸運」

舞園さやか 「超高校級のアイドル」

十神白夜（兄） 「超高校級の御曹司」

霧切響子 「超高校級の???」

桑田玲音 「超高校級の野球選手」

セレス 「超高校級のギャンプラー」

山田一三三 「超高校級の同人作家」

腐川冬子 「超高校級の文学少女」

葉隠康比呂 「超高校級の占い師」

朝日奈葵 「超高校級のスイマー」

大神さくら 「超高校級の格闘家」

石丸清多夏 「超高校級の風紀委員」

大和田紋土 「超高校級の暴走族」
不二咲千尋 「超高校級のプログラマー」

《修学旅行編メンバー》

藍染鳴花 「超高校級の着付け師」
アイリス 「超高校級の帰国子女」
巖上承太 「超高校級の怪盗」
西流克平 「超高校級のホスト」
赤松楓 「超高校級のピアニスト」
最原終一 「超高校級の探偵」
東条斬美 「超高校級のメイド」
真宮寺是清 「超高校級の民俗学者」
王馬小吉 「超高校級の総統」
獄原ゴン太 「超高校級の昆虫学者」
入間美兔 「超高校級の発明家」
キーボ 「超高校級のロボット」
百田解斗 「超高校級の宇宙飛行士」

春川魔姫 「超高校級の保育士」

星竜馬 「超高校級のテニス選手」

白銀つむぎ 「超高校級のコスプレイヤー」

天海蘭太郎 「超高校級の???」

夢野秘密子 「超高校級のマジシャン」

茶柱転子 「超高校級の合気道家」

夜長アンジー 「超高校級の美術部」

目次

Episode 0

第1話 | 1

Chapter 1 大嫌い、大好き

捜査編 | 6

学級裁判 前編 | 11

学級裁判 後編 | 16

(非) 日常編

学校探索編 | 22

カジノ編 | 27

Chapter 2 復讐開始

捜査編 | 32

学級裁判前編 | 38

学級裁判後編 | 42

(非) 日常編 2

外に出てみよう!編 | 48

Chapter 3 独裁総理大臣就任

捜査編 | 53

学級裁判 前編 | 59

学級裁判後編 | 64

(非) 日常編 3

Everybody★ライブ編

69

花火大会編 | 75

Chapter 4 shall we

dance?

遊戯施設編	133
それぞれの不安編	127
(非) 日常編5	
後日談編	123
学級裁判 前後編	118
捜査編	113
Chapter5 爆発殺人絵巻物	
クロマクインキラー	105
ウォーターイン才囚学園編	98
(非) 日常編4	
学級裁判 後編	92
学級裁判 前編	88
捜査編	80

Chapter6 血のチェックメイト	
捜査編	139
学級裁判前編	146
学級裁判後編	151

E p i s o d e 0

第1話

サア…

モブ「や…や…やめてくれ！」

紫苑「やめてくれもなにも…あんたは悪いことをした。その償いを…わからしてあげる。」

モブ「待て、待ってくれ…アアアアア…！」

ザクツ…グサツ…ドサツ…

紫苑「…ご愁傷様。」

は…今日も一日疲れた…殺し屋って大変だけど、楽しいよね…

家帰ってご飯食べて…寝て…

その瞬間、私は…落ちた。

何故か…暗闇に…

誰か…

誰か…

助けてっ！

??? 「ウプププ…楽しみだなあ…紫苑に会えるよ…ついに…愛しの紫苑に…♥」

ゴオオオ…

んん…ここ…

私は起き上がった。そして…見渡すと…

紫苑「ここ…何処…？」

知らないところだった。周りは道だけ。

そして…学校らしきもの。

紫苑「…才囚学園？」

そう、それは才囚学園（さいしゆうがくえん）という場所だった。

紫苑「知らないなあ…才囚学園なんて…」

とりあえず、入ってみることにした。

ガタガタ…

窓が揺れている。結構古いところみたいだ。

紫苑「…なんか話し声が聞こえる…」

―講堂―

紫苑「…講堂？」

ギイイイ…

茉莉花「！紫苑！」

紫苑「…茉莉花？」

紅葉「あれ？紫苑じゃん。」

紫苑「…え、お姉ちゃん？」

そう、そこには…沢山の人…いや、沢山の知り合いがいた。

紫苑「…どうなってるの…？」

紫苑「…みんなもここに連れ去られた…と。」

石丸「そういうことになるな！」

ソニア「ここが何処なのかも…」

入間「というか、一人のときが一番怖かったんだからな?!」

紫苑「…なんでこんな古くて…怖いところに…」

ピーンポーンポーンポーン！

モノクマ「皆さん、おはよう御座います！」

紫苑「モツ…モノクマ?!」

モノクマ「いやあ…会えるのを楽しみにしすぎて早くしちやった★」

九頭龍「はあ?!ふっぎけんな！」

モノクマ「そんなに怒らないですよ…ま、とびつきりのおもてなし、用意してるから！」

アイリス「とびつきりのオモテナシ?なんでスカ？」

夜長「ご飯トカですかね？」

モノクマ「ま、それはお楽しみで！」

紫苑「お楽しみでって…」

モノクマ「そのかわり、犠牲は貰っていくつもりだから!よろしく!」

紫苑「…犠牲って…コロシアイをしろ、と一緒よね。」

白銀「そういうことになりますね。」

西流「まあ、仔猫ちゃんが沢山いるからいいよね。」

十神(兄)「…キザが。」

これからどうなるかも、わからない…

その時だった。

ピンポンパーンポン

モノクマ「言い忘れてた！これが、最後のコロシアイだからよろしく！」

紫苑「…え」

嘘でしょ…これが最後ってことは…

全員…

本当に死ぬ…ということ?!

chapter 1 大嫌い、大好き 捜査編

そして、不安の中、私達は翌日を迎えた。

紫苑「…全員いるか確認するけど…」

秘密子「紫苑！アンジーがいないんじゃない？」

紫苑「え?!」

そう、それは夜長アンジーさんがいなくなった事件から始まる。

紫苑「…確か…」

昨日、アンジーちゃんを私を誘って美術室を探しに行った。

―昨日―

紫苑「…え、美術室を探したい？」

アンジー「そうなんだー、今すぐ！」

紫苑「ええ…わかった、行こっか。」

そして探しに行った。

紫苑「…とりあえず探そう！」

みんなですぐ探すことになった。

―美術室―

紫苑「まさかだと思うけど…」

ギイイイ…

紫苑「…！アンジーちゃん?!」

そう、それは夜長アンジー…アンジーちゃんの死体だった。

絵の具が散らばっており、彫刻が壊されていた。

紫苑「…誰が…」

ピンポンパンパンポン

モノクマ「死体が発見されました、死体が発見されました！」

紫苑「…嘘でしょ…」

―数分後―

秘密子「アンジーよー！なぜ死んだんじやあ…」

転子「ひどいです…」

紫苑「…」

左右田「…とりあえず捜査しようぜ、落ち込むな。」

紫苑「…うん。」

―捜査開始―

紫苑「…まず、アンジーちゃんはどややって死んだかよね…」

左右田「絵の具で死ぬことってあんのか？」

藍染「あり得ませんね、確かに絵の具は食べると危険ですが、美術部のアンジーさんはそれを知っているはずですよ。」

紫苑「…死ぬとすれば…」

桑田「絞殺か刺殺…しか考えられねえな。」

紫苑「…絞殺か刺殺…か。」

紅葉「でも、犯人の手がかりが無い…」

紫苑「…ん？これは？」

それは指輪だった。

紫苑「…アンジーちゃん、こんなの持ってたっけ…」

転子「なんですか？それは…」

紫苑「指輪。しかも、結構…高級な…」

モノクマ「よ！」

左右田「うわああああ！びっくりした！」

モノクマ「ごめんごめん、許して★」

紫苑「…！モノクマ！この学園って掃除した？」

モノクマ「えー…したよー？」

紫苑「…ありがとう、これで学級裁判に持ち越せそう。」

モノクマ「んー…それだけで学級裁判できないよ。」

紫苑「…まだ見つけるの…（――；）」

左右田「頑張ろうぜ。」

紫苑「はあ…？あれは何？」

左右田「ん？」

それは彫刻の欠片だった。

紫苑「…欠片がなんでこんなところに…」

モノクマ「まあ…ほどほどに頑張れ〜！」

紫苑「はいはい。」

モノクマ「冷たっ！」

紫苑「…てことで、証拠はこれくらいか…」

真昼「待って！」

紫苑「？」

真昼「これ…よく見ると、首元隠されてない？」

紫苑「…！本当だ！」

ちよつと、ずらして見た。

紫苑「…やっぱり。」

今回のこの事件は…絞殺で確定だ。

こうして、夜長アンジー殺人事件の学級裁判が始まった。

学級裁判 前編

！学級裁判開廷！

モノクマ「…では、説明だけするけどいい？」

モノクマ「この学級裁判ではクロを問い詰めてもらいます！そしてクロを見つけ出してもらいますが…間違ったクロを指名すると…全員処刑され、クロだけが生き残ります！」

モノクマ「とりあえず、頑張つてね？」

紫苑「今回の被害者は夜長アンジー…超高校級の美術部の人。」

十神（弟）「…で、犯人は誰なんだ？」

紫苑「それを問い詰めるのよ…（――；）」

紫苑「まずは昨日のアンジーの行動から考えよう。」

昨日のアンジーの行動は夜ご飯を食べたあと、私を誘って美術室を探しに行った。そして探せたら、美術室に籠もった…

紫苑「…それが夜の8：00頃だった。」

田中「ふむ…」

紫苑「けれど、誰かが美術室に入って殺した。それが犯人なんだよ。」

蜜柑「そうですね、やはりそうなりますよね…」

? 反論?

朝日奈「その推理ちよつと待って！」

朝日奈「待って、美術室を知ってるのはアンジーちゃんだけだよ？それはあり得くない？」

紫苑「！確かにそうかも…」

蜜柑「びえええ…」

紫苑「だから…アンジーちゃんは…」

誰かを誘って殺された。

紫苑「だから、アンジーちゃんを知っている人…」

よく知っているのはアンジーちゃんと同じクラスの…A―Iの私達の中に犯人がいるってことだよ。

蜜柑「えええええ?!」

左右田「はああああ?!」

? 反論?

入間「ちよつと待てっ!」

入間「待ってくれ?!オレ様たち以外にもいるだろ?!ほら…茶柱とか夢野とか!」

☒論破☒

紫苑「論破!」

紫苑「待ってちようだい。アンジーちゃんはこう言ってたんだよ。」

“あの時の大切な人に作品を見せたいんだ” って。

紫苑「…だから、A—1の私達しか可能性はないんだよ!」

左右田「嘘だろ…!」

ペコ「そんなことあり得るのか…?」

紫苑「…でも、なんでそんなことを…」

●反論ショーダウン開始!●

左右田「夜長は…大切な人について言ってたよな。」

田中「大切な人…伴侶とかか?」

蜜柑「恋人…ですか?」

赤松「確か…夜長ちゃんは、彼氏いなかったはずだよ?」

☒論破☒

紫苑「論破!」

BREAK!

紫苑「待って、夜長ちゃんは、彼氏はいなかったはずって言ったけど、夜長ちゃん自体恋つていうのを知らなかったんじゃない?」

最原「確かにそうかもしれませんが!」

紫苑「…だからこそ、犯人は腹が立って…」

? 反論?

腐川「その考え少し間違ってるわ」

腐川「そ…それは、違うんじゃないかしら。」

紫苑「なんで? だってそうでしょ?」

腐川「…それは死体に隠されているはずよ。死体には涙の跡があったわ。本人が泣いたのもあるかもしれないけど、犯人もポロポロって泣いてたのかも知れないわ。」

白銀「なるほど! てことは…」

紫苑「…犯人は嫌嫌ながら…殺したってことか。」

前編終

学級裁判 後編

◆クライマックス推理◆

紫苑「…先ず犯人は被害者に呼び出され、仲良くしていた。しかし、被害者に呼び出された理由は自分はまだ生きる価値がないから殺してほしいという話だった。けれど犯人は断った。そして、もう一つはその犯人の彫刻、何かを投げている彫刻を見せた時に怒りで冗談に首を締めようとした。けれど、被害者はいいよって言った。そして、二人は泣きながら犯人は殺した。そして、首元を隠して、近くにあった絵の具をぶちまけた。そして、その彫刻を壊した。けれど、犯人は本来の目的はたぶん結婚しようと思いい、指輪を持っていた。けれど、壊した時に飛んでしまい、あの場所に落ちてしまった。そして、その壊した時に使っていた被害者のハンマーは多分、犯人の部屋にあるはず。」

紫苑「だから…犯人は、桑田玲音！貴方よね？」

BREAK!

桑田「…よくわかったな。」

紫苑「…なんでそんなことをしたの？」

桑田「…アンジーがしてほしいって言ってたからよ。」

紫苑「でも…そんなことあるの？」

桑田「断つたぜ。一度は。けどな…」

アンジーのいつもの神つてるとかねえから…

桑田「…死にてえオーラが出てたんだよ。」

蜜柑「そんなの理不尽すぎますう！」

左右田「…」

桑田「仕方ねえだろ。俺は…アンジーのことが嫌いだったからな。」

赤松「…え？」

桑田「…正直言つてうるかさかったからな。」

夢野「そんなのひどすぎるぞい！」

茶柱「だから男死は嫌いなんですよ！」

桑田「へっ、嫌いなら嫌いではつきりしろよ。」

紫苑「…桑田くん…じゃない…」

桑田 「…お前らはわかんねえよな。」

紫苑 「…え？」

桑田 「じゃあ、問題。俺はなんで泣きながら殺したか？」

蜜柑 「そ…そんなのお…」

粕枝 「好きだからに決まってるじゃん。」

桑田 「…は…間違っている。」

日向 「え？違うの？」

桑田 「なら、その証拠、突き止めてみるよ！アホ！」

紫苑 「…そんな…」

●反論ショーダウン！●

紫苑 「桑田くんは確か、左右田といたはず。」

左右田 「…そうだ、ずっと俺と共にいた。」

☒論破☒

紫苑 「論破！」

BREAK!

紫苑「…左右田、それは偽証だよね？」

左右田「なんでだよ！ちげえよ！紫苑なら…信じてくれるだろ？」

紫苑「なら、証拠はあるの？」

左右田「え？」

紫苑「…その、いたっていう証拠。」

左右田「…っ…」

☒偽証☒

左右田和一 偽証

左右田「…途中から夜長に呼び出されていたよっ…」

桑田「…」

左右田「めつつつつちや喜んで俺に言ってたぜ。」

好きだった。

紫苑「…それが嘘なの？桑田くん。」

桑田「…あーあ、バレちゃったか…」

茶柱「も…もういいでしょう?!モノクマ！投票しましょう?!」

モノクマ「ムク…ムクムクムク…あ、投票する?」

夢野「すぐしてほしいぐらいじゃ!」

モノクマ「じゃ、オマエラのお手元のボタンで投票してください。」

紫苑「…桑田くん。」

桑田「ま、いいぜ。後悔なかったからな。」

モノクマ「…ということ、クロは桑田クンに決まりましたー!」

紫苑「…」

桑田「さっさと処刑してくれよ。」

紫苑「…ざけんな。」

桑田「?」

紫苑「ふっざけんな!何時までもヘラヘラして、何が嫌いだった?からかうのも程々にしろ、アホ野球選手!」

桑田「…からかってねえし。」

紫苑「…アンジーちゃんがどれだけ悩んだか知ってる？」

アンジーちゃんの日記にレオンに会えてよかったって書いてたんだよ？

紫苑「…それを踏みにじるなんて…酷すぎる！」

桑田「…そうかよ。ちゃんと罪、償ってくるからよ。」

紫苑「…謝ってよ、アンジーちゃんに。」

▶クワタレオンクンガシヨケイサレマシタ。

紫苑「…恋って辛いものなんだね。」

藍染「恋は辛いものだよ。」

江ノ島「恋はあまりしないことだよ。」

左右田「…そうだよな。」

！学級裁判閉廷！

(非) 日常編

学校探索編

惨めなものだ。

早速二人亡くなってしまうた。

ただ、救いたかった…だけなのに。

―美術室―

紫苑「…遺品がたくさん残ってる…」

ガチャ

茉莉花「…紫苑。」

紫苑「あ…茉莉花。どうしたの？」

茉莉花「ああ、アンジーちゃんの後に使おっかなーって。」

紫苑「…そっか。」

茉莉花「…辛いかもしれないけど、頑張ろう。」

紫苑「うん。ありがとう。」

気晴らしに探索を試してみた。

―食堂―

紫苑「…ここは食堂かあ…」

ん？あれは…

野木崎さんと葉隠さん…

紫苑「…おはようございます。」

由李「ん…おはよー。」

葉隠「おー、おはようだべ。」

紫苑「何をしているんですか？」

由李「朝ごはん食べてないから、食べようとしてたの〜」

葉隠「中々決まらなくて迷ってただべや。」

紫苑「…そうですか。」

由李「…辛いかもしれないけど生きて帰ろうねえ。」

葉隠「まさかの桑田つちとは思わなかっただべや。」

紫苑「…頑張ります。」

―庭―

…左右田だ。

紫苑「おはよう、左右田。」

左右田「おー、おはよう。紫苑。」

紫苑「…何見てるの？」

左右田「アネモネ。ここに咲いてるんだなっとな。」

紫苑「…綺麗…」

左右田「ここ、古いけど神秘的だよな。なんかミステリアスなんだよな。」

紫苑「…」

左右田「紫苑。お互い、頑張ろうな。辛かったら俺のところで泣けよ。」

紫苑「…ありがとう。左右田。」

―図書室―

あれは…石丸くんとお姉ちゃん？

紫苑「…」

紅葉「それで…つてうわあああああ！」

石丸「なんだね、急に…うわああああ！」

紫苑「…お姉ちゃん何してる訳…」

紅葉「そつちのほうが怖いから！」

石丸「紫苑くんか…驚いた…」

紫苑「…ここ、色々ありますよね。」

石丸「うむ！歴史本が沢山あつて勉強になる！」

紅葉「うん、紫苑も見てみたら？」

紫苑「はあ…」

―屋上―

あれは…西流さんと王馬くんだ。

紫苑「…おはよう御座います。」

西流「おはよう！仔猫ちゃん！」

王馬「おはよう。烏岳さん。」

紫苑「朝から何してるんですか…」

西流「いやー…我ながら朝日を…」

王馬「嘘つけ。本当は女子のこと見てたくせに。」

紫苑「朝から女子ですか…」

西流「おや？好きな子のことは見るだろう？」

王馬「見ないよ、普通は。」

紫苑 「そうそう…」

西流 「え、好きな子いないのかい？王馬くんは。」

王馬 「…少し気になる子はいる。」

紫苑 「…気になる子？」

王馬 「そうそう。なんだっけな…鳴る花って書く…」

紫苑 「それは…」

藍染鳴花ちゃんのこと？

王馬 「そうそう…な…んか俺ばかり怒られるから…」

西流 「それはいたずらするからでしょ？」

紫苑 「…なんか楽しそうですね。」

西流 「君も変わるって。」

王馬 「応援するから頑張って！」

紫苑 「…ありがとうございます。」

みんなから元氣貰っちゃった…

私は皆の希望になれるよう、頑張らないとね。

カジノ編

その夜。モノクマたちに呼ばれた私達は講堂に行つた。

ー講堂ー

モノクマ「ごめんねえ…こんな夜に…」

紫苑「…なんか用？」

モノクマ「ウププ、最初のオモテナシをしようと思いまーす★」

百田「最初の…オモテナシ？」

モノクマ「先ずは、目を閉じて…」

私達は目を閉じた。すると…

紫苑「…あれ？服が違うっ…」

蜜柑「びえええ?!」

春川「…変わってる…!」

石丸「どういふことだね?!」

モノクマ「簡単簡単。考えてみなよ。」

紫苑「え?…あ、カジノ…とか?」

モノクマ「そうでーす！カジノに行こうと思いまーす！」

紫苑「カジノ?!」

西流「久々だね。カジノは。」

アイリス「カジノですか?!」

モノクマ「後、カジノの他にも、バーとか…」

ナイトプールとか、レストランとか…

モノクマ「沢山あるから楽しんでよ★」

左右田「すげえー！」

入間「でも…犠牲つてやつは…あの桑田つて奴と夜長か？」

モノクマ「そういうことになるよね★」

紫苑「…そうなるのか…」

真昼「犠牲を払ってのお楽しみか…」

モノクマ「では、イツツ・シヨータイム★!」

ガタガタガタ…ジャジャーン!

紫苑「…この学校から移動するんだね…」

モノクマ「では、只今からモノクマカジノへ向かいたいと思います！皆様、覚悟はよろしくて？」

茉莉花「…覚悟は…」

紫苑「ある。」

モノクマ「では、イツツ・ショータイム！」

ゴオオオオ…

左右田「ちよ…ちよつと待て待て待て…！」

紫苑「めつつつつつちや早いっ…！」

茉莉花「こんなの無理無理無理！」

大和田「なんでこーなるんだよっ！」

紅葉「これは死ぬ…！」

ギギギギ…！

モノクマ「では皆様、お楽しみください！」

ペイツ

茉莉花「…置いてけぼり…？」

紫苑「…カジノだ…」

それは豪華な何億かけたのかわからないホテルみたいところだった。

紫苑「…ほえ…」

天海「すげえっすね。」

滝田「こんなの初めてっす！」

そして、みんなバラバラになり…

ーナイトプールー

私はナイトプールにいた。

紫苑「…はあー…」

左右田「何してんだよ。」

紫苑「うわっ…左右田かあ…」

左右田「…ふっ…わりい、笑っちゃまった。」

紫苑「え？殺されたいの？」

左右田「それはやめろ。」

紫苑「なんか…いいのかな…」

左右田「なにがだよ。」

紫苑「こんなにさ、楽しんでさ。天国のアンジーちゃんと桑田くんは寂しがるよ

ね…」

左右田「…」

紫苑「なら、いつそ…」

左右田「おい。」

紫苑「え？」

バツシャーン

紫苑「ちよっ…これ、モノクマからくれたドレスっ…」

左右田「落ち着け。」

紫苑「！」

左右田「確かに怖いかもしれねえけど、紫苑は紫苑だ。おまえらしく生きろ。」

紫苑「…そうだね。ありがとう。」

左右田「後、目え閉じろ。」

紫苑「え？」

その瞬間、花火が上がった。そして、私と左右田は重なり合ったー

捜査編

chapter 2 復讐開始

その翌日。私達はホテルに泊まり、レストランで朝ごはんを食べることになった。
ーレストランー

紫苑「…」（普通に美味しいよね…）

ソニア「しくおくんくさくん！」

紫苑「うわっ…ソニアさんか。」

ソニア「…昨日左右田さんとラブラブしてましたよね？」

紫苑「っ…ちよ…」

ソニア「見てましたわ、ナイトプールで涼もうとしたら…」

まさかの左右田さんと紫苑さんが重なり合っていましたから！

紫苑「あ…」

ソニア「うふふ。」

紫苑「待つて…内緒にしてて、お願…」

さやか「紫苑さん！まさかのキスしたんですか?!」

紫苑「?!」

日寄り「紫苑ねえ、色々と左右田にいとやっつてんだね〜」

紫苑「待つ…待つて！」

ペコ「おめでどう…」

紫苑「ペコちゃん?!」

江ノ島「男子もこんな感じになってるよwww」

紫苑「ええええ?!」

由李「良かったねえー、ラブラブ♡」

紫苑「…もう恥ずかしい…」

夢野「お主もやるのお。」

紫苑「あ…私からじゃなくて…」

入間「お前も結構エロいことやってんだな」

紫苑「やってないっ！」

紅葉「お姉ちゃん嬉しい…」

紫苑「お姉ちゃんは落ち着いてっ！」

茉莉花「…おめでどう。」

紫苑「茉莉花っ?!」

セレス「おめでとうございます。よかったですわね。」

紫苑「あのねえ…違うって言ったら違うのっ！」

ドカーン

紫苑「…え？」

何か…爆発音した…？

赤音「おい！花村のところから火が出てるぞ！」

紫苑「！花村くん?!」

ーハナムラテルテル 部屋ー

バァン！

紫苑「げほっ…けむたいっ…」

左右田「紫苑は外にいてろ！」

紫苑「で…でもっ…」

左右田「早く！」

紫苑「…っ、わかった！」

ゴオオオオ…パチパチパチ…

紫苑「…」

モノクマ「死体が発見されました、死体が発見されました！」

紫苑「…花村くん…」

カジノで起きた最悪な事件。

こんなにも辛いことはある？

これで最後のコロシアイなのに。

最後まで、皆で生きたい。

モノクマ「とりあえず、捜査する？」

紫苑「…うん。」

―捜査開始―

紫苑「…花村くん…なんで死んだの…」

さやか「今回は火災ですが、何か…血の匂いが…するんですよ。」

紫苑「血の匂い？」

さやか「そうですね。」

百田「確かに匂いするな。」

星「んで、凶器はこれだな。」

紫苑「それは…」

刃物セットだった。

紫苑「それはモノクマから全員に配られた護衛用の…」

九頭龍「なら、誰かないやついるんじゃないの？」

紫苑「…でも、無償で貰えるから…」

七海「倉庫には沢山あるから…盗めば取れるよね？」

紫苑「その問題もあるんだ…」

石丸「でも、ここから倉庫までは遠いはずだが。」

???「それはここにもあるよ。」

紫苑「…え？」

戦刃「ここにもそれはあるってこと。」

江ノ島「残姉ちゃん！」

紅葉「戦刃ちゃん！」

戦刃「ただいま、遅くなった。」

紫苑「えつと…」

戦刃「あ、はじめましてだね。私は戦刃むくろ。超高校級の軍人だからよろしく。」

紫苑「えつと…なら、ここにもあるってこと？」

戦刃「そう。こここの裏の倉庫にも刃物セットはあるの。」

茉莉花「あるとならば…全員持つてる。」

紫苑「ということは…」

大和田「ちよつと待ってくれ。これ、飛び散り方が違うくねえ？」

紫苑「え？」

大和田「烏岳ならわかるはずだろ？」

紫苑「飛び散り方…？…あ！」

この飛び散り方…プロの人だけができる飛び散り方…！

紫苑「私でもできないんだよ？これができるのはプロの殺し屋だけ！」

最原「そんなのわかるんだね…」

紫苑「これで学級裁判に行けそう…！」

―捜査終了―

学級裁判前編

！学級裁判開廷！

紫苑「…今回の被害者は花村輝々。超高校級の料理人。」

終里「くっそ…花村…」

紫苑「悔やんでも何も出ないよ。誰が犯人か問い詰めよう。」

七海「まずは現場の状況からだね。」

田中「大量の血痕が部屋に飛び散っていたな。」

石丸「それは、花村さんの血痕なのか…？」

紅葉「確かに、調べたけど確かに血痕だったよ。」

紫苑「待って、どうやって調べたの？」

紅葉「理科室にある実験具と専用の液体を使えばできるよ。」

紫苑「へえ…」

不二咲「そろそろ、そこまで…」

紫苑「あ、ごめん。…で、落ちていた刃物セットはこの倉庫もあって、交換するこ
とが可能。」

百田「それで犯人はそれで花村さんを殺したんだな！」

☒反論☒

舞園「その考えは違うと思います！」

舞園「…もしかしてかもしれませんけど、刃物セットはカモフラージュのために置いたんではないでしょうか。」

木菟「そんなこと、あるのかな…」

紫苑「カモフラージュ…？」

じゃあ、凶器は…

紫苑「…もしかして、毒物？」

左右田「毒物っ?!」

紫苑「でも花村くんは、料理人…そんなことはわかると思う…」

大神「無味無臭とかだったらわからないのでは？」

紫苑「そっか！無味無臭なら、料理人でもわからないはず！」

☒反論☒

セレス「ちよつとよろしくて？」

セレス「花村さんは確か超高校級の料理人でしたわよね？」

紫苑「え、うん……」

セレス「なら、プロ並みの嗅覚があるはず。そんな、無味無臭の毒物なんてわかるはずですわ。」

紫苑「……じゃあ、何で殺したの……？」

野木崎「……全部っていう可能性はない？」

紫苑「……全部?!」

野木崎「それだけ、恨んでたんなら犯人が考えていたのを全部殺っちゃったとか。」

東条「確かにそれはあり得るわね。」

紫苑「……それだけ、恨んでいた……？」

真宮寺「恨んでいた……でも、それってよっほどでないと殺すと思うヨ。」

小泉「確かに。私達初見だよね？」

紫苑「……そうよね。」

☒反論☒

ソニア「控えおろう！」

ソニア「お待ち下さい！花村サンは知り合いではないと思いません！」
紫苑「…ど…ど…どういこと?!」

ソニア「花村さんは私達B―Iのクラスメートでした。そして、女性が好き…」
だから、B―Iの女子の皆さんが怪しいと思います！

セレス「あら…」

紫苑「じゃあ、B―Iの人が怪しい…と。」

澤田「いやいやいや！おかしいっす！」

春川「なんで私達が怪しまれないとだめなの?!」

東条「落ち着いて。」

紫苑「疑いたくはないけど…その可能性のほうが高いんだよ…」

春川「…勝手にしたら。」

澤田「紫苑ちゃんの気持ちもわかるんすけど…」

七海「うーん、花村くんを殺した恨みのある同じクラスメート…か…」

紫苑「最後にもう一度整理してみよう。」

(前編終)

学級裁判後編

◆クライマックス推理◆

紫苑「先ず、犯人は今までずっと被害者のことを恨んでいた人物。カジノを楽しんでいた被害者は犯人に呼び出され、彼の部屋へ。そして、犯人は無味無臭の毒物を彼の飲み物に入れ、渡した。そしてそれを飲んだ犯人は死んだ。その後、自分の持っていた刃物セットで何回も刺した。血が飛び散るまでにね。その後、ガソリンをかけねずみ火花を出した。そして、何事もなくカジノに戻る。翌朝、起こしに来た十神の弟がドアを開けた瞬間、爆発するっていう仕組み。そして前日の夜中、倉庫にこっそり入り、自分の刃物セットと予備の刃物セットを交換した。それが犯人の動き。そして、飛び散り方とこれをマスターできる犯人が……」

紫苑「貴方よね？春川魔姫。」

BREAK!

春川「……よくわかったよね。」

紫苑「魔姫ちゃん…貴方が犯人とは思わなかったよ。」

アイリス「ハルマキ?!なんで貴方が?!」

春川「…あいつがしつこい。あいつが全部悪い。自業自得よね。」

紫苑「確か、魔姫ちゃんって元殺し屋だったよね?」

春川「そうよ。それがなにか?」

紫苑「飛び散り方。その時点でわかっていたけど…」

春川「なら、いいじゃない。」

滝田「いいじゃないって…なんなんっすか…」

春川「別に誰が殺そうが人の勝手でしょ?プライバシーってやつよ。」

紫苑「…でも、殺し屋って私利私欲のためにするんじゃないよ。」

春川「…は?」

紫苑「私がいざ実際そうだけど、依頼されたら殺すってことでしょ?殺し屋ってそうなの。わからなかったら1から教えてあげるけど?」

春川「うっ…うるさいっ!プロじゃないくせに!」

紫苑「…そのプロが基礎もわからなくて、それゆえにこんなに簡単な証拠まで残してくれるとは。プロの殺し屋も落ちたよね。」

石丸「し…紫苑くんが本気になってしまっている…?」

左右田「紫苑、そのへんに……」

紫苑「そして、こっそり夜中に刃物を取り替えるとか……ダサすぎ。」

紅葉「紫苑、落ち着いて……」

紫苑「ほんと、情けなさすぎる。私だったら血痕なんて残さず殺せるけどね。」

春川「……っ！」

紫苑「……動機は恨んでいたって……コロシアイだからこそ許せるけど殺し屋界では許せないからね？ そんな、単純な理由は。私利私欲の塊じゃん。」

春川「……」

紫苑「それでいいわけ？ 私利私欲の春川魔姫さん。」

春川「……わ……私だつて殺したくなかった。」

でも、気づいたら殺してた……

紫苑「は？ ふざけないでくれる？」

百田「鳥岳さん、そのへんでストツプ……」

紫苑「さつきからゴチャゴチャゴチャうっせえんだよ！」

みんな「!!!」

紫苑「なんだよ、ストツプとかそのへんに……とか！ 流石に殺し屋として言わなきやならないことを邪魔すんな！」

左右田「紫苑！」

紫苑「……！」

左右田「落ち着いて言え。そんな本気を出すな。」

紫苑「……っ……」

春川「……ごめんなさい、私利私欲に殺っていたかもしれない。」

西園寺「……怖いよお……紫苑ねえが怖いよお……」

大和田「……さすがの俺でもびびった。」

茉莉花「紫苑本気出したら怖いから。」

紫苑「……それでいいの？」

春川「わかっていきます。」

紫苑「……モノクマ。」

モノクマ「ムク……ムクムクムク……話は聞かせてもらった！いや、聞いてないけど。」

紫苑「……」

春川「……ごめんなさい。」

紫苑「プロ失格。」

春川「はい……」

モノクマ「では、犯人は春川魔姫さんで処刑いたします！」

ガチャ…ギイイイ…

春川「…」

百田「…ハルマキ…」

紫苑「…」

♡ ハルカワマキサングシヨケイサレマシタ。
♡

左右田「…紫苑、どうした？」

紫苑「いつもより、カツとなりすぎた。」

小泉「西園寺ちゃん泣いてたしね…」

紫苑「…みんなに怖い思いさせた。ごめん。」

罪木「確かに怖かったですけどお…」

苗木「紫苑さんが感情移入してしまったんだなって思っちゃったよ。」

大和田「…すっげー怖かった。」

紫苑「…本当にごめんなさい、ちゃんと反省します。」

モノクマ「はーい、出発しますけど大丈夫？」

紫苑「…お願いします。」

モノクマ「では、出発します★」

！学級裁判閉廷！

(非) 日常編2

外に出てみよう!編

そして、事件から三日後―

なんにも変哲はなく、お姉ちゃんと話していた。

紫苑「…」

紅葉「…紫苑、失態しちゃったね…」

紫苑「初めてだよ…そんな失態したの。」

紅葉「まあ、次気をつけな。」

野木崎「…あ、いたいたあー。」

紅葉「由李?どうしたの?」

野木崎「モノクマが講堂にしゅーごーだって。」

紫苑「またあ…?」

―講堂―

モノクマ「ウププ、皆さん!外に出たくありませんか?」

紫苑「…何を急に。」

モノクマ「ということで、モノクマタウンに行ってみませんか？」

ペコ「またオモテナシか…」

モノクマ「ここらここら！辺古山クン！そんなに怒らず！」

紫苑「…で、それが何。」

モノクマ「ということで！外に出てみよう！」

モノクマ「今から言うことをよく聞いてね。」

モノクマタウンに出かける際は電子生徒手帳をカードリーダーに読み込んでね★

そして、出かけるのは夜の10時まで！

んで、超えてしまつて戻れないつて方はモノクマタウンのホテルに泊まつてね★タダ

だから安心してね★

モノクマ「以上！あと…」

モノクマタワーとグレイプハウスとアップルハウスは入らないでね★

モノクマ「色々ネタバレだから★」

苗木「ネタバレつて…（　　）；）」

紫苑「…とりあえず私達が活動できるのはモノクマタウンだけつてことね。」

モノクマ「そゆこと★ということで楽しんでねー★ハバナイスデー★」

紫苑「…モノクマタウンかあ…」

左右田「なあ、紫苑!」

紫苑「…何左右田。」

左右田「…モノクマタウン行かねえ?」

紫苑「いいけど。」

左右田「いいのか?!」

紫苑「うん。」

左右田「じゃあ、行こうぜ!」

紫苑「…」

ーモノクマタウンー

紫苑「どこ行くの。」

左右田「んー?お前の好きそうなところ。」

紫苑「へ?」

ーモノクマメイクアップショップー

紫苑「…私メイクしない…」

左右田「ほら、行ってこい!」

紫苑 「えええええ?!」

ドン

紫苑 「左右田っ！殺すー！」

左右田 「ハバナイスデー！」

紫苑 「まじで殺すけどよろしくくて？」

左右田 「とりあえず見てこいつてー！」

紫苑 「…私メイクしないのに…」

江ノ島 「…あんた…メイクしないの？」

紫苑 「うっお！びっくりした…」

江ノ島 「…ああー、メカ野郎に連れてこられたのか。」

紫苑 「…凶星。」

江ノ島 「あんたメイクしないの？」

紫苑 「しない。殺し屋なんか愛とか恋とかいらないし。」

江ノ島 「うわ、もったいな。そんな美人な顔して。」

紫苑 「…」

江ノ島 「ん？それいいんじゃない？」

紫苑 「え？」

江ノ島「あんたみたいなクール系女子はピンク系のリップがいいよ。特にグロスが百点満点!」

紫苑「…」

左右田「おせえな…」

ウイーン

紫苑「お待たせ。」

左右田「おう…っ?!」

紫苑「…勧められたからつけてみただけっ!べ…別に左右田のためになんかっ!」

左右田「…そうかよっ…」(めつつつちや俺の彼女かわいいっ…)

紫苑「…」(褒められたあ…!嬉しいっ…!)

そしてそんな中、世にも恐ろしい狂乱事件が進んでいることを、私達はまだ知りませんでした…

chapter 3 独裁総理大臣就任 捜査編

その夜のこと。

♪♪♪

ピッ

紫苑「…もしも…」

石丸「ああ、紫苑くん！すまないが、帰れなくなつた！」

紫苑「…え？」

今の時刻は9：20：

紫苑「…今からだと帰れると思うけど…」

石丸「外をみたまえ！」

紫苑「え？」

ザー…

紫苑「…雨降ってる…」

石丸「そういうことで、帰れないと兄弟に伝えてくれ！では！」

ブツッ

紫苑 「…何よ…」

ー翌朝ー

紫苑 「ふあー…」

赤松 「し…紫苑先輩っ！」

紫苑 「何、どーかした…」

赤松 「さ…最原くんがっ…！」

紫苑 「…え？」

ーモノクマタウン 倉庫ー

紫苑 「…っは…」

百田 「お！おはよう！紫苑先輩！」

紫苑 「…最原くんが…殺されたって…」

百田 「…それは本当だぜ。」

紫苑 「そんなんっ…」

く♪

紫苑 「こんな時にメール…って…」

ピッ

紫苑「な…なにこれっ…!」

赤松「え…」

百田「酷すぎる…」

それは日寄子ちゃんとゴン太くんの、死体写真だった。それとコメントには「探してみろ」と。

紫苑「…っ、探してみろって…」

その時、悲鳴が聞こえた。

紫苑「何っ…?!」

走り寄ると、小泉ちゃんが腰を抜かして指を指していた。その先には日寄子ちゃんの死体が。

小泉「…は…ひ…日寄子…ち…ちや…ん…」

紫苑「落ち着いてっ…」

その後もゴン太くんの死体を探して、3人、一夜にして殺された。

紫苑「一夜でこんなにも殺せるの…?」

殺し屋ぐらいしか…

モノクマ「おはようございまーす!」

紫苑「…ねえ、モノクマ。モノクマがもし犯人だったら、一夜にして3人殺せる?」

モノクマ「え？無理無理無理。二人いないとだめだと思うけど？」

紫苑「…よね。」

―捜査開始―

百田「まずは…」

紫苑「捜査から。」

赤松「息びつたりすぎる…」

紫苑「…3人もいるから大変だな…」

小泉「一人ずつ解決しよう。」

紫苑「まずは、最原くんから。」

赤松「最原くんは冷凍室に入れられてたよ。」

紫苑「凍死もあるけど、凍死は難しいよ。」

小泉「でも、閉じ込められていたとかは…？」

百田「それはあり得ねえな。だって、終一は暴力されていたからな。」

紫苑「え？どういうこと？」

百田「終一の腕に跡があつたんだよ。青いアザがな。」

小泉「じゃあ、最原くんは犯人に暴力されて…」

紫苑「待って？モノクマタウンに残っていたのは…」

石丸委員長だけなはず……

紫苑「……石丸くんに聞いたら何か知っているかも。」

赤松「石丸先輩ですか？」

百田「もしかして、そいつが犯人だったりして……」

紫苑「そんなことは……ないっ！石丸委員長は絶対人を……殺さないから！」

百田「そ……そんなムキにならないでくださいよ……」

小泉「……じゃあ、なにか見ていたかもね……」

紫苑「……次は日寄りちゃん……」

小泉「……絶対犯人見つける。許せない。」

紫苑「日寄りちゃんは縛られていた……？なら、毒殺……」

小泉「違うと思う。日寄りちゃんは絞殺されてから縛られたんだと思う。」

紫苑「……あ、そっか、跡があるから……」

小泉「……日寄りちゃんは巻き込まれたのかも。」

紫苑「なんで？」

小泉「日寄りちゃん、何故かフラフラしてたから……」

紫苑「……ロシアイのシヨックかな……」

紫苑「最後は……ゴン太くん。」

百田 「何で殺されたのかわかんねえよな…」

赤松 「…待って、これ毒殺だよ。」

紫苑 「なんで？」

赤松 「虫さされの跡があるんだよ。この感じだと…スズメバチ…の跡だね。」

紫苑 「スズメバチ?!」

百田 「は?なんで…」

紫苑 「…もしかして、ゴン太くんの私用物を使って?」

赤松 「そうだよ。ゴン太くん、最近はハチを研究してるみたいだから。」

紫苑 「それを利用して…!」

! 　　そうか、そういうことか! この一夜にして殺した犯人…一人じゃない! 協力者がいる

―捜査終―

学級裁判 前編

！学級裁判開廷！

モノクマ「いやー…一夜にして3人も殺せる犯人がいるものですねえ！さて、誰がク口なのでしょう…ウブウブ…」

紫苑「今回は…3人。最原終一くん、西園寺日寄子ちゃん…そして獄原ゴン太くん。」
左右田「俺、寝てたからな…朝早かったな…」

キーボ「最原くんが殺されるって聞いたとき驚きました…」

紫苑「今回、この被虐な殺人を犯した犯人が誰なのか…」
必ず突き止めてみせる。

粕枝「まず、モノクマタウンで殺人が起きるとか…絶望だよね、そのひと…」

紫苑「あんたはうるさい。黙ってて。」

粕枝「あ…うん。」

紫苑「まず、最原くんは昨日どのような行動を取っていたかよね。」

アイリス「昨日、最原サンは東条サンとイツシヨにイマシタ。」

東条「確かに一緒に手伝ってくれたわ。けれど、途中から電話が来て、モノクマタウ

ンに向かったわ。」

紫苑「それ、何時頃でした？」

東条「確か…7：30でしたね。」

紫苑「…まだ、通れる。次に日寄りちゃんの行動…」

日向「俺が見たな。西園寺の姿。」

紫苑「どんな感じだった？」

日向「…結構シヨック受けてた感じだったな。着物はちゃんと着てたけどな。」

小泉「そんな…日寄りちゃん…」

紫苑「…多分、コロシアイの影響でシヨックを受けてたのかも。時間はいつ？」

日向「確か…8：30だったな。」

紫苑「…まだ、通れる。次は…」

赤音「なあ、この殺人の目的はなんなんだよ…」

紫苑「わからない。だからこそ、突き止めるんだよ。ゴン太くんの行動…」

王馬「俺が見たよ。」

紫苑「…王馬くんが？」

王馬「俺、着物ちゃんの部屋に行こうとしてたらゴン太が走ってる姿を見たんだよ。」

紫苑「…それが…」

王馬「確か、9:00。」

紫苑「そして…」

石丸くんから電話がかかってきたのが9:20。

紫苑「…石丸委員長。何か目撃した？」

石丸「あ…ああ。黒ずくめの男を見てな…殺される前に逃げ出したんだ。」

紫苑「…黒ずくめ？」

石丸「ああ。全体的に黒ずくめだった。凶器を持っていてな…」

紫苑「…それがいつ？」

石丸「確か…9:10…だったはず…」

紫苑「…となると…」

☒反論☒

小泉「その推理はピンボケだよ！」

小泉「ちよつと待って、黒ずくめだとしたらゴミ箱とかに入れてるはずだよ！」

紫苑「え?!」

小泉「だって、黒ずくめって全身なんですよ？なら、服を着てから殺したから返り血

が出るはず！」

紫苑 「…確か…」

☒反論☒

石丸 「その考え間違っているぞ！」

石丸 「僕の証言が間違っているというのか！」

紫苑 「そうじゃないけど…さあ…」

石丸 「確かに黒ずくめを見た。けれども…」

粕枝 「暗闇で見えただけかもしれないってことでしょ？」

紫苑 「!そういうことか…」

粕枝 「でも、見たのは9 : 10。月はその犯人と反対の方向にあったはずだよ。」

紫苑 「え?! てことは…」

小泉 「石丸委員長の証言は間違ってるってことだよ！」

紫苑 「じゃあ…委員長の証言は偽証…？」

? 偽証?

石丸清多夏 偽証

石丸「な……なぜだ……僕の証言は間違っていない……」

紫苑「……委員長、本当のこと言つて……そうじゃないと……貴方が……」

石丸「本当だ！黒ずくめの男を見たんだ！」

紫苑「……どうしよう……」

苗木「とりあえず、クライマックス推理をしない？そこから……」

紫苑「……そうするしかないよね……」

(学級裁判前編終)

学級裁判後編

◆クライマックス推理◆

紫苑「まず、犯人は二人いる。その一人が第一の被害者を呼び出して殴ったり蹴ったりして死なせた。その後、冷凍室に入れて第二の犯行をしようとしたとき、コロシアイのシヨックでふらふらしていた第二の被害者が見てしまった。そして、もうひとりが追いかけて首を絞めた。けれど、手を染めたくなかつたもうひとりの犯人はその場にあつたテープでぐるぐる巻きにして、柱にくくりつけた。その後、もうひとりの犯人はホテルに戻つて私、烏岳紫苑に電話をした。そしてその一人が第三の被害者のすきを狙い、スズメバチで毒殺。そして、その一人は今も何処かに隠れている…」

紫苑「犯人は…信じたくなかつたよ、石丸清多夏委員長！」

BREAK!

石丸「な…何故なのだ！僕は何もしていない！」

紫苑「私だつて信じたくなかつた！けれど…私しか電話をしてなかつた…」

「兄弟に伝えてくれ」って。

紫苑「だからこそ、信じてたけど……」

左右田「なあ……そのもうひとりって……」

司令官「待たせたな！清多夏！」

紫苑「え?!」

その時、扉がバーンと開いて……中からは石丸委員長そっくりの人が出てきた。

紫苑「も……しかして、石丸委員長のもうひとりの犯人……?」

司令官「ああ、待たせたな。そして初めましてだな。私は石丸司令官！清多夏の従兄弟だ！」

紫苑「い……従兄弟?!」

さやか「そんなことっ……あるんですか?!」

司令官「あるとも。清多夏が困っていたら私に頼ってきてな。」

朝日奈「で……でも、委員長は何も……」

司令官「そう、すべてのこの事件は私が殺った！清多夏は何もしていないぞ！」

紫苑「でも、委員長の……」

大切な大切な、バッチがテープに張り付いてたんだ。

紫苑「しかも、テープの貼り方がぐちゃぐちゃだったから、初心者がやった、何も……経験していない人がやった。だから……委員長が殺ったんだなってわかった。」

石丸「…僕が殺った。すまなかつた…」

小泉「…日寄りちゃんを返してよ…返してよ！風紀委員のくせにつ…」

司令官「はっ、所詮はそういうことになるとは思っていたが…」

山田「なんか、怖い人ですなあ。」

紅葉「どうあがいても…先生の罪は逃れられないんだね…」

紫苑「紅葉姉ちゃん、もしかして…」

石丸委員長のこと…

紅葉「そ…そんなことはないよ！ただ…」

霧切「ちよつと、脱線してるわよ。」

紫苑「ご、ごめん…」

不二咲「信じられないよお…石丸くんが人を殺すなんて…」

大和田「…石丸、お前はそいつに操られている。いつもの石丸じゃねえよ！」

朝日奈「そうだよっ！あの、委員長はどこいったの?!」

石丸「…ぼ、僕も嫌だった…けれども、眠らされて…」

何故か自分を失っていたんだ。

石丸「次に目が覚めたのは西園寺くんを殺したあと…」

由李「イインチョ…」

小泉「…っ…日寄子ちゃんっ…」

石丸「すまなかつた。きちんと罪を償つてくる。」

司令官「じゃあ、始めようか！モノクマ！」

モノクマ「ムク…ムクムクムク…ん？オシオキの時間？」

司令官「ああ！よろしく頼むな。」

モノクマ「了解！では、扉の前にお立ちください！」

紫苑「…」

紅葉「…先生っ…」

石丸「仕方ない。紅葉くん、僕が居なくても勉強に励むように。」

紅葉「やだっ…先生についていきたいのにつ…」

石丸「…すまなかつた。」

紫苑「…っ…」

ーイシマルキヨタカ シレイカンガシヨケイサレマシタ。ー

紅葉「…もう病みそう…」

紫苑「私だつてそうだよ、信じられないよ…」

由李「イインチヨ、操られてたんだね…」

小泉「…少し言い過ぎたかも。何も…悪くないのにね。」
「老兵は去る」。厳格ではあったが、何事でも前向きだった、風紀委員は私達の前から去っていった。

―学級裁判閉廷―

(非) 日常編3

E v e r y b o d y ★ライブ編

石丸委員長がいなくなったあと、紅葉姉ちゃんは泣きはらして帰ってきた。

紫苑「…お姉ちゃん、辛い?」

紅葉「当たり前でしょ…辛いよ。」

紫苑「…本当は好きだったんじゃないの?」

紅葉「…そうだよ、けれど本人の前では言えなかった。」

紫苑「…そっか…」

ペコ「紫苑。」

紫苑「?どうかした?」

ペコ「いや…瀧田がライブをするっていうから来ないかって話だ。」

紫苑「…ライブ?」

―★ライブ会場―

紫苑「…みんないるんだ…」

九頭龍 「はー…なんで呼ばれんだよ、寝てえし…」

紫苑 「あはは…」

紅葉 「…」

江ノ島 「大丈夫かっ…つてくらっ。」

紅葉 「…ごめん、少し寝る。」

江ノ島 「え、大丈夫？」

紅葉 「うん…ありがとう。」

バタン

江ノ島 「…はー…イインチョがないから暗いんだな…」

紫苑 「…盾子ちゃん、お姉ちゃん…」

江ノ島 「…寝るって言ってた。」

紫苑 「…そっか。」

湊田 「レディースアードジェントルメン！よーこそ、ミュージックフェスへ！」

紫苑 「…ミュージックフェス？」

湊田 「そうっす！今日は、コロシアイなんて忘れて、フェスするっすよー！」

左右田 「まじかよ…」

湊田 「では、エントリーナンバー！ミス舞園さやかー！」

ん?…舞園ちゃあああん?!

紫苑「な…何してるわけ?!」

さやか「みんなー!盛り上がろうねー!」

♪♪♪

さやか「…!ありがとうございますー!」

澪田「いやーっ、いい曲っすね!さて、続いては…苗木誠くーんの、バラードっすー!」

だから、苗木くんも何してるのお?!!

もうツツコミ追いつかん…

紫苑「…結構いい曲だし…」

澪田「ありがとうございますーっ!そして…続いては赤松ちゃんのピアノ伴奏っすよー!」

赤松ちゃんまでえ…何してんのよ…

♪♪♪

赤松「ありがとうございます!」

澪田「おおーっ、流石ピアノスト!さてさて…ラストを締めるのは…紫苑ちゃん!

出てきて下さーい!」

紫苑「え?!」

待て待て待て待て待て待て! エントリーしてないっ!

澪田「一緒に歌ってくれまっすから!」

紫苑「ええ…」

もう、ヤケクソだ。

紫苑「…何歌ったらしいの?」

澪田「適当に!」

紫苑「ええ…じゃあ、歌わしていただきます、MELLOWの『I

u』…」

くくくく

紫苑「♪…只、会いたくて…只、繋ぎたくて…」

???「♪本当にずるいよな、お前って…」

紫苑「?!」

左右田「♪って貴方に言われたくないなあ…」

紫苑「♪何がずるいかもわからないし、だから…」

クルッ

左右田「?」

紫苑「♪…好き。」

女子「きやああああ!？」

男子「おおお?!」

左右田「♪そ…そうかよつ…そういうとこ…好きじゃねえ…ぜ。」

紫苑「♪I miss you…貴方だけが大事だったから…」

左右田「♪I want you…欲しくてたまらねえ…」

左右紫「♪私達だけの世界は…星のように綺麗…だ…か…ら…」

みんな「おおお!」

滝田「いえーい!学級1のカップル、カズイチくんとシオンちゃんによる、『I

miss you』でしたー!」

紫苑「…恥ずかしっ…」

左右田「あ…初めて人の前で歌った。」

江ノ島「あんたやるじゃん。」

さやか「あれ、結構ロマンチックな曲なんですよ!すごいですっ!」

ソニア「感動しました!素敵でしたよ!」

セレス「あなたもやるのですね、ふふふ。」

紫苑「あー…なんかたまたま…」

澤田「大成功っす！シオンちゃん、ありがとうっす！」

紫苑「恥ずかしかったよ…」

澤田「まじっすか?!めちやくちや美味かったっすよ！」

紫苑「…ありがとう。」

ガチャ

小泉「あ、みんな、花火大会するみたいだから見に行かない？」

紫苑「…花火？」

花火大会編

ヒュー……ドーン

滝田「うわあー！きれいつすー！」

紫苑「ほんと……」

滝田「……あ、用事思い出したんで、すみませんつす……」

紫苑「ああ、大丈夫だよ。」

タツタツタツ……

紫苑「……はー……あれ、過去ーはずい……」

左右田「よく頑張つてたよな、紫苑。」

紫苑「?!いつ……いつから……つ……」

左右田「え、だいぶ前」

紫苑「殺すつ……！」

左右田「おいおいおい、落ち着けて……」

紫苑「ほんとつ……左右田つて最低な男子つ……！」

左右田「はー……悪かったつて。滝田に頼んどいたんだよ。二人つきりにしてくれつ

て。」

紫苑「…っ…」

左右田「…お前、ここから出たらどうするつもりだよ。」

紫苑「…先生になろうかなって…」

左右田「先生って…大学とかどーすんだよ、高校とか…」

紫苑「わかつてる。なれないことも…失うことも。」

グシャグシャ…

紫苑「ちよっ…ちよっと！何すんのよっ！」

左右田「心配すんな、俺たちもそうだからな。」

紫苑「…」

何故か…左右田の横顔が凄く…優しいなって思ってしまった。

紫苑「…ありがとっ…」

左右田「てか、紫苑、(性格)丸くなったよな！」

紫苑「は？」

左右田「いやー…長かったよなー！」

紫苑「…殺されたいのね、左右田は…！」

左右田「は?!」

紫苑「安心して、安楽死させてあげる。」

左右田「ちよ……ちよつと待て待て待てつ……？」

チユ

紫苑「……そ……左右田、性格の話よね……」

左右田「……おう、そうだけど……」

紫苑「……ありがとう、左右田のおかげだよ。」

左右田「……」

紫苑「私さ、左右田に出会ってよかったかもー！なんか、明るくなったしー……人生薔薇色っ……」

左右田「紫苑。」

紫苑「え、何左右田っ……」

ヒュー……ドーン……

紫苑「……え？」

左右田「……俺、本気だと怖えけど。誘ったのは紫苑だよな？」

紫苑「ちよ……つ……ちよつと待ってつ……」

左右田「いいよな、それくらい。」

紫苑「待ってつ……左右田っ……」

小泉「何してんの、左右田っ！」

ガン

左右田「いつてえ！小泉何すんだよ！」

小泉「何つて…変態メカニック野郎から紫苑ちゃんを救い出したただだよ。」

紫苑「あ…ありがとつ、小泉ちゃん！」

タツタツタツ…

左右田「…ほらー！小泉のせいで紫苑逃げ出したじゃねえか！」

小泉「あんたが悪いっ！」

左右田「ええ…まじかよー…」

タツタツタツ…

紫苑「はー…危なかった…」

…こうして見ると、アイランドの花火、思い出すなあ…

お姉ちゃんも見てるかな…

花火つて供養のために放たれるって聞くよね…

紫苑「…ごめんなさい、救えなくて。」

ごめんね、思いが伝わらなくて。もつと、頑張るから…応援してて。

紫苑「…必ず、黒幕を突き止めてみせる。」
その日が来るまであとー30日ー

chapter 4 shall we dance? 捜査編

その翌日ー

紫苑「…あ、石丸くんの…っ…」

朝日奈「そうなるよね、わかるよ。」

葉隠「わかるだべや。」

小泉「皆、辛いのは一緒だから。」

ブオン

逆向「ウプププ…みーなさーん、おはよっ★」

紫苑「…えっ…」

朝日奈「え、誰？」

霧切「誰かしら…」

逆向「ねー、紫苑、ひさしぶりっ♡」

紫苑「…な…なっ…なんでっ…」

逆向「ウプププ…僕がモノクマのしよーたいでした！」

みんな「ええええええええ?!」

紫苑「な…なんでいるのっ…?!」

逆向「知りたい?」

紫苑「…っ、知りたいっ!」

逆向「俺は、事故で死んだけどたまたま息が吹き帰ったんだよねー。だから、黒幕になつたわけっ★」

左右田「…紫苑、知り合いか?」

紫苑「…」

逆向「あ、ちなみに紫苑とは元カップル!こーさいしてたんだー★」

左右田「はっ?!」

小泉「…紫苑ちゃん、そうなの?」

紫苑「…そっ…そうだよっ…私の元彼、逆向陽向だよ。」

ソニア「そんなんっ…」

左右田「…俺以外にも彼氏いたのか。」

紫苑「…ごめんっ…なんでっ…いるのか、わからない…」

左右田「…なあ、元彼サンよ、ここから出してくんね?」

逆向「それは無理。ごめんだけど…変態メカニック野郎に指示されたくないんだよ

ねー。」

左右田 「は？今なんつた？」

逆向 「え？変態メカニック野郎？」

左右田 「おい…ふざけんなよ、俺たちを殺して何が楽しい？それは紫苑を苦しめてるのか？」

紫苑 「も…もういいよ、左右田っ…」

左右田 「紫苑に嫌がらせして楽しいのか？あ?!」

逆向 「ふーん…なんかやる気なくなったから消えるね。じゃあねー。」
ブチッ

左右田 「おいつ！話聞けっ！」

紫苑 「いいって…もう…いいから…」

左右田 「…わりい、ムキになってしまった。」

紫苑 「…」

タツタツタツ…

さやか 「紫苑さんっ！セレスちゃんがっ…！」

紫苑 「…え？」

ーモノクマ農園ー

ゴオオオオ：

紫苑「！セレスちゃんっ！」

左右田「なんだこれっ…！」

私達の前には火炙りみたいなの、魔女狩りみたいなの…強く燃えている、セレスちゃんだった。

なぜ、セレスちゃんとかわかったのかというところ…セレスちゃんの大切な靴が置いてあったからだ。それにさやかちゃんは気づいて、私に報告をしたんだ。

紫苑「そんなっ…セレスちゃん…っ…」

山田「ひいいい…セレス氏…！」

左右田「これはひでえ…！」

霧切「今回で焼死は2回目…酷い殺人事件ね。」

ダダダダダッ！

紅葉「ねえ！し…紫苑っ！」

紫苑「お姉ちゃん?!どうしたのっ…」

紅葉「赤音ちゃんがっ…!!!」

紫苑「…え？」

―体育館―

バンツ

紫苑「ひ…酷いっ…！」

式大「終里…！」

終里ちゃんはぶら下げられており、切り裂きジャックみたいな切り裂け方で、後ろには「The end」と書いていた…

紫苑「もう…無理…！」

左右田「落ち着けっ…！」

茉莉花「こんなの…酷いよ、今までよりも、酷い…！」

紅葉「…誰が…こんなことを…！」

苗木「と…とりあえずっ、捜査しない？そこからじゃないと始まらないよ。」

紫苑「そ…そうよね…！」

―捜査開始―

紫苑「…まずは、セレスちゃんから。セレスちゃんはなんでこの農園に…！」

山田「うーん…なぜでしょうかね…セレス氏なんて農園は大っ嫌いなはずなのでは…

？」

紫苑「確かに！セレスちゃんは汚れるのが嫌いなはず！」

白銀「あのー…この可能性はないでしょうか。まず、何処かでセレス先輩を殺して、そこから運んだとかはありえませんかね？」

左右田「それなら、あり得るよな！」

田中「しかし、それなら何故、靴が汚れていない？」

左右田「そうだよなあ…」

大和田「靴を持ちながらってことはないか？」

不二咲「あり得るかも！だったら汚れないよ！」

霧切「なら、どうやって殺したのよ。」

夢野「うーん…なんじやろうなあ…」

茶柱「これはありえませんか?!絞殺か撲殺か！」

紅葉「撲殺なら、頭の方に傷があるはず。絞殺だったら、首の跡があるはず。もしかしてかもしれないけど、シヨック死ってことはない？」

さやか「シヨック死…ですか？」

紅葉「そう。電気でシヨック死させてから運ぶの。これは一般でもできるよ。」

鳴花「あり得ますね。てか、一般でもできるんですか…」

紅葉「だから、初心者でもできるってこと。」

紫苑「なるほど…」

朝日奈「次は終里ちゃんだね。」

紫苑「なんで、『The end』って書いてたんだろ…」

左右田「わかんねえよな…」

十神（兄）「簡単だろう、『終』だからじゃないのか？」

由李「ダジャレ？」

紫苑「ん…待つて？終里ちゃんは『The end』。セレスちゃんは『Sere
nity』…『冷静』…てことは、『黙って終り』ってこと？」

ソニア「それは…要するに静かにしろってことですか?！」

茶柱「恨みが強すぎますー!」

日向「怖いな、そのメツセージは…」

紫苑「でも、なんで切り裂きジャックみたいな切り裂け方できるんだろ。」

天海「そんなの…」

カラン…

天海「ん？なんすかね、これ。」

紫苑「え？」

キラキラキラ…

天海「…これ、アイスピックっすね。氷を壊すときに使うんすよ。」
キーボ「でも、血なんかついてませんね。」

天海「こう考えるのはありっすか？このアイスピックはカジノのときみたいにカモフラージュで、本物は捨てたか持っているかかっていう推理っす。」

紫苑「それは…あり得るかも！」

左右田「これで、いけそうか？」

紫苑「うん。犯人がわかるかもしれない。後は、行動を掴めば…！」

―捜査終了―

学級裁判 前編

！学級裁判開廷！

紫苑「さて：行動を突き止めるけど、昨夜みんなは花火見てたよね？」

王馬「昨日は結構遅かったねー！何時頃までやってたっけな…」

東条「確か、11：00まで、やってたわね。」

紫苑「だから、その場に居なかった人が…」

左右田「犯人ってことか？」

紫苑「そういうことになるよ。」

田中「確か、全員いたな。」

承太「え？西流さんはトイレに行くって帰りましたね。」

西流「え？何？オレ疑われてる？」

紫苑「疑わってるわけではないけど…」

西流「…そ。つまんないの。」

苗木「じゃあ、セレスさんを見かけた人いない？」

鳴花「私、見ました。セレスさんと花火見てたら…」

『少し花を摘みに…』ってトイレ行きましたね。

紫苑「トイレ行つたのね…終里ちゃんは？」

澤田「澤田が見ましたー！身体動かしてくるって体育館行きましたっすー！」

紫苑「…その他は？」

ペコ「待て、私が見た。」

紫苑「え？」

ペコ「終里はその前にトイレに行っていた。話をしたら、お腹が痛えって言っていたな。」

紅葉「もしかして…お腹が痛い…」

由李「何か思いつくことあるの？」

紅葉「…！わかった！お腹が痛いって言うことは下剤を使ったんだよ！」

紫苑「下剤?!」

茶柱「あの…お腹が痛くなる薬ですよね？」

入間「そんなの…ここにあるとすれば、タウンか理科室にしかねえぜ？」

紫苑「なるほど…下剤でお腹を痛くして…」

☒反論☒

罪木「待つててくださいい！」

罪木「下剤でそんなに痛くなりませえん！何粒も飲んだらわかりますけど…しかも、粒状態だと飲み込ませるのが難しいですう！」

入間「それもあるか！」

真宮寺「じゃあ、どうやってなんだろうネ…」

百田「…なあ、俺見たことあるんだけどさ。粉状の下剤あつたぜ？」

紫苑「え?！」

百田「ドラッグストアで絆創膏探してたらたまたま見つけてさ。なんか、覚醒剤みたいな感じだったな。」

紫苑「じゃあ、犯人は粉状の下剤でセレスちゃんとか赤音ちゃんを痛くして…後はどうやってシヨック死させたのかよね…」

大和田「これは考えられねえか？理科室にある、電極棒(?)で…」

腐川「でも、どうやってシヨック死させるのよ…直接じゃあるまいし…」

アイリス「その可能性…後ろからだといけるのではないデシヨウカ？」

☒反論☒

左右田「俺が推理してやる！」

左右田「そんなのあいつら、気づくって！俺の解釈では…」

まず、水道管をちよつとだけ壊すんだよ、その後そこに電極棒を置いて…踏んだらシヨック死だ。

左右田「それなら事故にでも見えるし、完全犯罪だ。」

紫苑「すごい！こんなの考えれなかったよ…」

星「メカニックだからわかったんだな。」

入間「俺様だってわかったしな!？」

紫苑「とりあえず、みんなの今までの意見をまとめてみよう。」

―学級裁判 前編終―

学級裁判 後編

◆クライマックス推理◆

紫苑「まず、澤田ちゃんのリイブの前の夕食で粉状の下剤を第一の被害者と第二の被害者の夕食に入れた。そして、花火の時、二人はお腹が痛くなり、トイレに。そして、あらかじめ壊していた水道管と電極棒を置いて…二人をショック死させた。その後、二人を一人ずつ倉庫に運んだ。翌朝、朝早くに第一の被害者を括り、火炙りにして焼死を思わせるようにした。そして、第二の被害者を吊り台に吊らして脚立に乗って切り裂きジャックみたいな切り裂け方をした。そしてダイニンググメツセージを残して…偽のアイスピックを置いて…そして犯人は何事にも変わらず、私達に紛れ込んだ。」

紫苑「この残酷な殺人事件を起こしたのは…西流克平！貴方よね?!」

BREAK!

西流「…あーあ、ばれちゃったか。」

さやか「え…?」

西流「ま、どーせこのコロシアイで生き残る気はなかったし。今までありがとうね、仔猫ちゃんたち。」

アイリス「…西流さん…」

西流「あと、まあNo. 1ホストがいなくなるから寂しくなると思うけど…」

☒反論☒

紫苑「ちよつと待って！」

紫苑「…西流くん、貴方殺してるときどう思ってたの？ていうか、なんで生き残る気がなかったの？それが聞きたい。」

西流「…」

ペコ「何も…喋らない？」

西流「…ちつ、優等生ぶりやがって…」

九頭龍「…は？」

西流「おめーらなんかクズ野郎だよ、クズでバカな奴らめ！」

由李「なんで豹変したのお?!」

西流「このコロシアイの中で…刺激って言うもんねえのかよ?!殺すだけ?!ふざけん

なつて!」

王馬「おー、面白そー♪」

夢野「何が面白いんじや…」

西流「正直言つて、女子はブスばーつかりだしな、男子も変態ばつかりだな、クズ!」

紅葉「えええええええ?!」

ソニア「そんなつ…! 酷すぎますつ!」

紫苑「それは酷いつ!」

朝日奈「女子に言うことではないでしょ?!」

江ノ島「直接的すぎよ!」

左右田「変態じやねえよつ!」

大和田「おめーなんかに言われたくねえよ!」

百田「それは酷すぎるぜ?!」

真宮寺「なんの罪もないのにネ。酷いヨ。」

西流「俺は本当のことだけ言つてんだけど。殺してるときもあー、爽快だなーつて思つてたし。」

さやか「セレスさんの気持ち考えたことあるんですか?!」

ペコ「終里がどれだけ苦しんだかわかつてるのか?!」

紫苑「許せないっ……人の気持ちを踏みにじんで……」

西流「は……さっさと終わってくんない？ 処刑したいんだけど。」

紫苑「……許さないからねっ?! そんな……人の気持ちを踏みにじる人は!」

西流「……ちっ、勝手にしとけ、クズ優等生ぶり女。」

バンツ!

西流「……!」

左右田「……ちっ、お前今なんつつた?」

紫苑「そ……左右田……?」

西流「はあ?」

左右田「なんて言ったか聞いてんだよ! ボケが!」

田中「雑種?!」

日向「左右田?!」

ソニア「左右田さん?!」

左右田「……答えねえのか? さっさと殺されたきや、俺の質問に答えろ、クソ雑魚ホス

トが!」

西流「……ちっ、クズ優等生ぶり女だよ。」

左右田「……お前、紫苑にそれを言ったんだな?」

西流「…なんだよ、早く…」

左右田「…紫苑がどれだけお前に優しくしてくれたかわかってんのか？」

西流「…もういいだろ？ さっさと…」

左右田「お前は女の愛する気持ちと男の友情の気持ちを踏みにじんだんだ。それに加えて、『クズ優等生ぶり女』？ 『プスばかり』？ お前…俺らを舐めてるのか？ ああ?!」
ペコ「左右田…落ち着け…」

左右田「お前は殺してるとき、爽快だなんて思っていた…はあ？ 殺して爽快だなんて思っているのおめえだけだよ！ みんな、クロの奴らは後悔してんだ！ おめえだけだよ、クズで、最低で…そんなのでホストしてたのか？ ぜってえモテねえよ！ ちゃんと反省してこい！ 出直してこい！ 紫苑に絶対に謝れ！ いいな?!」

西流「…っ…」

モノクマ「えーっと…左右田クンそろそろ処刑していいのかな？」

左右田「…やっていいぜ。元彼サンよ。」

モノクマ「りよーかい、では、西流クン扉の前にお立ちくーださいーい！」

西流「…ソーダ。」

左右田「なんだよ。」

西流「…何もねえ。」

ぎいゝいゝ

―セイリユウカツヒラサンガシヨケイサレマシター

左右田「…」

紫苑「…つ、左右田…」

左右田「ま―たムキになつちまつた…俺、お前の保護者並みにうるせえよな。」

紫苑「…ううん。ありがとうね。」

左右田「…お前はあの時怒らなかつたのかよ。」

紫苑「別に…言われても…」

左右田「でも、俺はお前のこと必ず守るからな。誰に殺されそうになつても必ず。」

紫苑「…ありがとう…左右田…ううん、和くん。」

左右田「つ…！」

！学級裁判閉廷！

(非) 日常編4

ウォーターイン才囚学園編

ーモノクマタウンー

紫苑「あーつつーい…」

左右田「あちいな…」

鳴花「暑いですね、単刀直入に言うと。」

王馬「てか、着物ちゃん、着物着てるから暑いんじゃないの…。」

鳴花「確かにそうですが…」

紫苑「流石に倒れる…」

左右田「そうだな…」

王馬「紫苑ちゃん、あとどこ回るのー?」

紫苑「あとはあ…スーパーマーケットオ…」

左右田「死ぬー…」

鳴花「流石にまずいです…」

王馬「えええ…!?!」

ースーパーマーケットー

紫苑「すずし い…!」

左右田「はー…ここに永遠いてえ…」

鳴花「まあ、また今夜もイベントがあるみたいですが…」

王馬「なんだっけ、ナイトプールだったかな?」

紫苑「な…ナイトプール?!」

左右田「まじか?!何処の…」

鳴花「多分前の場所…しか。」

王馬「あー、あそこで紫苑ちゃんと左右田センパイがちゅーして…」

紫苑「してないっ!」

左右田「してねえよ!」

鳴花「息ぴったりですね。」

王馬「おしどりふーふー。仲良いしよーこだよ!」

紫苑「ん?てことは水着?」

左右田「お?」

紫苑「…ええええええええええ?!」

左右田「紫苑?!」

紫苑「私…水着無理無理無理…」

鳴花「なぜ…」

王馬「珍しー。」

ー夜ー

紫苑「はー…やってけないかも…てか、眠いから寝る…」

コンコン

入間「おーい、殺し屋女ー！いるかー？」

赤松「そんなこと言わないのっ…！紫苑先輩ー、いますかー？」

ガチャ

紫苑「…何？」

赤松「あ、いえ、モノクマが呼んでて…」

紫苑「…モノクマが？」

ー講堂ー

ぎい

白銀「あ、来ましたね！」

紫苑「え？」

茶柱 「早速、着替えてもらえますよ！」

紫苑 「はあ？」

さやか 「紫苑ちゃん、いいですよねえ…全部似合うんだし…」

紫苑 「ちよつと待て」

霧切 「大人しく堪忍しなさい。」

紫苑 「いや、待て」

罪木 「楽しみですう！」

紫苑 「だから待て」

東条 「左右田さんを喜ばせましょう。」

紫苑 「東条さんっ?!」

白銀 「ふっふっふ…紫苑さん、覚悟してくださいよ…!!」

紫苑 「ええええ?!」

ーナイトプール会場ー

左右田 「…なんなんだよ…これ…」

天海 「いやー…白銀さんにやられたっすね…」

王馬 「そーゆーものでしょー。ナイトプールなんだし。」

日向 「暑いな…」

九頭龍 「夜だから涼しい方だぜ？」

左右田 「はー…女子遅くね？」

カタン

白銀 「おまたせしましたー！」

さやか 「待たせましたー！」

紫苑 「…」

さやか 「ほら、紫苑ちゃん、行きましようよ！」

腐川 「押すけどいいよね、許して」

紫苑 「ちよ…ちよつとっ！」

トン

左右田 「っ…!!」

紫苑 「ちよつと、腐川ちゃん押さないでよっ…」

ブツシャー

紫苑 「左右田?!」

天海 「あー…キャパオーバーっすか…」

江ノ島 「そりゃ、キャパオーバーなるよね、紫苑たん綺麗だもん。」

紫苑 「白銀ちゃんが悪いのっ！」

白銀「私何もしてませんよ？（☒?☒）？」

紫苑「してたよっ！」

左右田「か…つてか、これで隠しとけ！」

紫苑「え」

左右田「俺、頭冷やしてくるから！変な目で見た俺がわりい！」

バツシャーン！

紫苑「えええええ?!」

由李「仕方ないよねえー、ラブラブ♡」

紫苑「ちよっとっ！」

天海「てか、似合ってるじゃないっすか！」

日向「そうだぞ！自身持つて！」

茶柱「大成功っですね！」

紫苑「…うん…」

入間「お？照れてんのかー？」

紫苑「照れてないよっ！」

夢野「さて、今から始まるぞい！」

キーボ「楽しみましょう！」

不二咲「楽しみだねえ。」

何もかも忘れて、楽しみたい。けれど、忘れられない。

『クズ優等生ぶり女』

…本当にそうかもしれない。ずっと、ずっと、ずっと…

…あれ？西流くんって初対面よね？

なのになんで、初対面じゃない感じなんだろう…

バシャー…

左右田「お？どーした。」

紫苑「…うん。なんでもない。」

…なんか嫌な予感する。

クロマクインキラー

モノクマ「みんなー？楽しんだー？昨日は。」

左右田「俺は大惨事だったけどな…」

紫苑「やっぱり変態。」

左右田「はあ?!」

モノクマ「まあ、今日も楽しんでほしいんだけど…」

紫苑「ん？」

モノクマ「てか、ここからは離宮に行ってもらおうよ★」

紫苑「離宮?!」

大和田「別館ってことか？」

モノクマ「そーそー、モノクマタウンの奥の世界！」

紅葉「奥の世界?!楽しみ！」

紫苑「お姉ちゃん…子供じゃないんだから…」

むくろ「確かに奥の世界は楽しみかもね。なんか気になってたし。」

濡田「楽しみますー！」

モノクマ「じゃあ、ここはもう来ないからよろしく★そして、荷物は別館のグレープハウスとアツプルハウスに分かれて置いてるよ★」

紫苑「へえ…つてか、誰が一緒なのよ…」

モノクマ「あ、言つとく？これがメンバーだよ★」

《グレープハウス》

十神白夜（弟）

七海千秋

ソニア・ネヴァーマインド

粕枝風斗

罪木蜜柑

葉隠康比呂

江ノ島盾子

霧切響子

山田一二三

不二咲千尋

夢野秘密子

茶柱転子

キーボ

最原終一

星竜馬

王馬小吉

野木崎由李

烏岳紅葉

木菟星汰

巖上承太

アイリス

《アップルハウス》

日向創

式大猫丸

田中眼蛇夢

烏岳紫苑

左右田和一

九頭龍冬彦

辺古山ペコ

澁田唯吹

小泉真昼

葭原茉莉花

藍染鳴花

苗木誠

舞園さやか

十神白夜（兄）

大神さくら

大和田紋土

腐川冬子

朝日奈葵

赤松楓

東条斬美

真宮寺是清

白銀つむぎ

入間美兎

天海蘭太郎

百田解斗

紫苑「…てか、グレイプハウスのほうが少くない？」

ソニア「確かに…」

モノクマ「グレイプハウスね、狭いの。」

紅葉「そういうことね…」

鳴花「今回は…事件が起きませんように。」

王馬「起きるかもよ、着物ちゃん。」

百田「そんなこと言うなよ…」

モノクマ「てことで、出発しますけど、大丈夫？」

朝日奈「うん、楽しみ！」

モノクマ「てことで、行きますか！ついてきてね★」

ーモノクマタウンー

ぎいいい…

モノクマ「ここからは電車に乗るから仲良くしてね★」

ガタンゴトン…きいいい…

紫苑「すごい…電車だ…」

左右田「嘘だろ…」

白銀「なんか千と千尋の神隠しみたいですね、楽しみです！
ガタンゴトン…」

紫苑「…すごい…きれい…」

左右田「そんなにか…？」

茉莉花「確かに綺麗かもね。」

不二咲「どこまで行くんだろうねえ。」

入間「改造したら怒られるかな、やりてえ。」

左右田「俺もっ…」

紫苑「バカ野郎、なんで参加すんだよ変態左右田和一。」

左右田「おまつ…！」

茉莉花「それはアンタが悪いから。」

田中「そうだぞ、雑種。」

左右田「なんで俺だけえ?!」

ガタンゴトン…プシュー…

モノクマ「はい、ついたよ。」

紫苑「凄い、塔…」

左右田「なんか高えな、螺旋階段でもついてんのか？」

天海「なんかピサの斜塔っぽいですね。」

東条「さあ、行きましようか。」

紫苑「…うん…」

なんだろう、この不快感…

桑田「きちやだめだ、帰れ。」

春川「殺されます、帰ったほうがまだマシです。」

石丸「帰るんだ、僕の最後の…お願いだ。」

西流「帰ったほうがいいんじゃない？オレからの助言。」

??「ようこそ。モノクマ…いや、ぼくの世界へ。」

ゾツ…!

左右田「どうした？行かないのか？」

紫苑「あ…えと…」

真宮寺「どうしたノ？寒気でもしタ？」

紫苑「…えと…」

田中「何かあったのか、紫女よ。」

白銀「何かありましたか？」

由李「なんでも言ってねえ。」

紅葉「…紫苑が寒気をしたって…毎回嫌な予感が当たるの。だから…なんか感じたの？」

紫苑「…ううん、寒いだけ。大丈夫。」

紅葉「…本当に？なんか言いたいことあればいいなよ。」

入間「ま、そんな事件はないと思うぜ。」

紫苑「うん。ほら、行こっ。」

…この中に黒幕はいない。

…処刑で殺された中に黒幕がいる。

桑田くん？ 魔姫ちゃん？

石丸委員長？ 克平くん？

一体…誰なの？

少し寒い風が私達を通り過ぎた。

chapter 5 爆発殺人絵巻物

捜査編

その夜。アップルハウスの私達はゲームをすることになった。

ーアップルハウス トークルームー

紫苑「…で、なんで呼び出したわけ？」

白銀「うーん、ゲームがしたかったからじゃないですかね？」

茉莉花「はー…私寝たい…」

左右田「何すんだよ。」

赤松「ふっふっふっ…これをお願いします！人狼ゲーム！」

紫苑「ああ…人狼…」

天海「ていうか…人間さんは？」

澤田「是清クンもいませんっすね。」

紫苑「…部屋は？」

左右田「あー…呼びに行ったんだけどな、鍵が…」

大和田「俺も呼びに行ったら、あいつはいなかったぜ。」

紫苑「…まさかつ…事件とか…ないよね？」

田中「あり得るかもしれないな。」

紫苑「…助かるうちに早く行こう！」

ーイルマミウ ヘヤー

ガチャガチャ

紫苑「入間ちゃん?! ねえ、大丈夫?!」

??? 「うわああああああア！」

紫苑「?! 真宮寺クン?!」

ガチャガチャ…

紫苑「開かないっ…! どうしようっ…このままじゃっ…うわあああああん!」

ペコ「紫苑、少し落ち着け。」

大神「貸せ。」

ガツシャーン!

紫苑「はあ…! 入間ちゃん! …ってあれ? 真宮寺…クン?」

ヒュウウウ…

ペコ「…なぜだ、声が聞こえたはず…!」

左右田「どーなってるんだよっ!」

田中「なぜだ！民の霊の声（真宮寺の声）が聞こえたはずだが…！」

白銀「どういうことですか?！」

天海「こ…これって…」

紫苑「…幽霊現象…?!」

ザワ…

濔田「ぎゃあああ！そんなことあるんつすか?!」

日向「こんなことはないはず…！」

式大「なぜじゃあ！なぜ、聞こえたんじゃあ！」

大和田「幽霊なんて俺は信じねえ！」

小泉「…ね、ねえ…レコーダーもないの…？」

茉莉花「この状態だと…な…ないよ…」

小泉「もう嫌あ！帰りたいい！」

日向「あの小泉が慌てる…異常なんだ…！」

モノクマ「やつほー★」

みんな「ぎゃああああああ！」

さやか「こ…怖いですよっ！」

腐川「こんなのあり得ない、こんなのあり得ない…」

十神（兄）「せ……せつ……説明をしろっ！鳥岳紫苑！」

紫苑「そんなのっ……そんなのっ……知らないよっ！」

苗木「ど……どうなってるんだ……」

モノクマ「も……とりあえず操作したら……？見つかるかもしれないじゃん、レコーダー。」

みんな「はあ……そうだよな……」

―捜査開始―

紫苑「ま……まずっ……れ……レコーダー探そつ。見つかるかも。」

茉莉花「……ね、ねえ、紫苑。……っ、机の裏にもベットの裏にも、椅子にもっ……っ……っ……いてなかつたよ……」

小泉「もう気絶しそう……」

紫苑「小泉ちゃん、落ち着いて……」

東条「ほ……ほっ……ほ……本当にないの？」

茉莉花「じ……事実だけど……うん。」

腐川「は……嫌よ……こんな幽霊現象。」

さやか「じゃあ、真宮寺さんはどこにつ?!」

百田「そ……それじゃあ、い……人間は誰に殺されたんだよっ！」

朝日奈「こんなの…怖いよお…」

赤松「…もつとこ…怖かったんだよ、い…人間ちゃんは…」

九頭龍「…な…なあ、これは…ど…どうやって殺されたんだよ…？」

紫苑「…た…多分だけど…絞殺…」

ペコ「…絞殺か…」

日向「粕枝いなくてよかったな…は…はあ…」

大和田「…絞殺…か…」

大神「ただ…の絞殺か…」

鳴花「…どうしたら、殺せるの…で…デシヨウカ…」

天海「め…鳴花チャン、カタカナになつてゐるつすよ…」

紫苑「…ねえ、もう嫌…」

濔田「唯吹だつて嫌つすよ…」

モノクマ「も…じゃあ、学級裁判、君たちだけで始めるよ。いいよね？」

ペコ「よ…よろしく頼む…」

こうして、私達は幽霊現象が起きたまま学級裁判が始まった…

―捜査終了―

学級裁判 前後編

！学級裁判開廷！

モノクマ「まー、今回は：被害者が二人？かな。静かな夜の幽霊殺人事件！犯人はこ
の中にいるのかな？では、始めてクダサーイ★」

紫苑「…まだ、震えてるよ…」

小泉「も…もう、見たくないっ…」

腐川「はあ…嫌…こんな幽霊現象殺人事件。わたし帰りたいわよ…」

十神（兄）「…で、どうするつもりだ、烏岳。」

紫苑「…まず、レコーダーはなかった。その時点でまだいた。」

さやか「え？なんでわかるんですか？」

紫苑「まだ、その時点でレコーダーがないのと組み合わせると、真宮寺くんはまだい
た。けど…」

大和田「けど？」

紫苑「…ごめん、怖がっているとこ申し訳ないんだけど…」

きつと、真宮寺是清くんが犯人なんだよ。

みんな「はあああああ?!」

赤松「どういふこと?!」

百田「なんでそうなるんだよ!」

☒反論☒

田中「邪眼の力を舐めるな!」

田中「待て、紫女。その理由は言えるか?」

紫苑「えつと…まず、私達は人間ちゃんの部屋についた瞬間、開かなくてパニックった。そして、それを使って、真宮寺くんは嘘の悲鳴を出した。そして、大神ちゃんが扉を開けた音と同じく、草むらに隠れた。そして、私達が出た瞬間、外に逃げた。」

鳴花「では…真宮寺さんはまだ近くに…?」

紫苑「ううん。そこからは…わからない…」

九頭龍「いわゆる…行方不明ってことか?!」

ペコ「では、どこに行ったの?!」

式大「ここ以外出れる場所はないぞお?!」

紫苑「だからこそ…わからないんだよ…」

朝日奈「なんか…寒くない？」

茉莉花「もー！そんなこと…言わないでっ！」

紫苑「…ねえ、モノクマ。ここ以外出れないよね？外には。」

モノクマ「うーん…行ってみる？」

紫苑「え？」

モノクマ「お…僕は知ってるよ？出口。」

―古神社―

ヒュウウウ…

紫苑「ひいつ…不気味っ…」

田中「なんだ、この不快な風と声（多分生ぬるい風と虫の声）は…」

左右田「俺帰りてえ…」

小泉「っ…怖いつ…」

紫苑「小泉ちゃんは私に捕まってて。絶対に守るから。」

式大「しかし、不気味じゃのお。」

モノクマ「はい、到着。」

紫苑「え？」

モノクマ「この大木の穴から逃げ出すことは可能。だけど…」
茉莉花「だけど？」

モノクマ「…行方不明になることが多いんだよね…」

みんな「ええええええええええええ?!」

日向「よ…容易に入るなってことか…」

紫苑「さ…さっきの推理に追加すると…」

真宮寺くんは逃げ出した後、この大木の穴を見つけて、入った…けど、行方不明になつてしまった…てことか…

滝田「ぎやあああ!怖いつすよ!」

天海「ガチ怖つすね…」

鳴花「…行方不明になった、真宮寺さん。聞こえていますか?」

ヒュウウウ…

???「…ゴ…メ…ン…」

みんな「…ぎやあああ!聞こえたあー!」

鳴花「…こ…怖いですよっ…」

紫苑「もう…無理っ…」

小泉「ひいつ…無理っ…」

左右田「なんなんだよっ…怖え…」

田中「あああ…◇◀▲▶?◀☆▶?○▽☆…」

式大「なんだ…この大木は…」

大神「不気味な木だな。」

朝日奈「怖い…」

腐川「はあ…もう帰ろ…」

十神（兄）「ゆ…幽霊現象なんて信じないからな?!」

モノクマ「みんなビビってんじゃん…」

！学級裁判閉廷！

後日談編

―翌朝―

コンコン、ガチャ

粕枝「みんな、大丈夫かな？ って…え？」

ズーン

夢野「何があつたんじゃ…」

茶柱「ひええ?! 死んでますか?!」

星「…東条…大丈夫か？」

紫苑「…んん…あ、ごめん…」

紅葉「待つてwwwwどうしたの?!」

紫苑「…みんな、起きて。情けない姿になつてるよ…」

左右田「ああ…つてうわあああああ!」

田中「す…すまないっ!」

グレみんな「いや、どうした?!」

く説明中く

紅葉「…あつはつは！そんなことがあつたの?!」

王馬「いやー、面白っ!」

紫苑「いや、人一人死んで…」

由李「あれ? いないのお? 入間ちやあん。いるよね?」

アプみんな「…え?」

由李「私い、幽霊体質なんだけどお…いるよねえ、後ろにい。」

アプみんな「…後ろ?」

粕枝「うん。後ろ。」

アプみんな「…え…ぎやあああああああ!」

七海「本当の…幽霊…現象になつてる…ね。」

小泉「私嫌…取り憑かれてる…」

江ノ島「いや、そうじゃなくて…こいつの冗談だから。幽霊体質じゃねえし。私は…」

紫苑「…な…何…」

江ノ島「…その神社、本当にあつたの?」

九頭龍「…は?」

ペコ「ど…どういことだ…?!」

江ノ島「いやさ、私探検したのよ、残姉と。その時、なかつたよね、神社なんて。」

むくろ「うん。なかつたよ。」

江ノ島「だから……」

結局、あいつはまじでどっかに行つた……つてことだよね。

アプみんな「……もういやだああああ！」

腐川「もう嫌、もう嫌、もう死にたい、死にたい……」

大和田「夢じゃねえ……幽霊は……夢じゃねえ……」

茉莉花「待つて、私は……いるよね……」

紫苑「……ちよつと着いてきてっ！」

―森林地帯―

ガサガサ……

紫苑「まじであつたの！ここに……大木がっ……」

紅葉「嘘お。ないつて。」

紫苑「ほら、ここっ……」

アプみんな「……あれ？」

そこにはただ、墓があつた。削られていたが名前は……

「真宮寺是清」と「人間美兔」。

アプみんな「…夢じゃなかったああああああ!?」

ソニア「…大丈夫ですかね…」

不二咲「大和田くんが心配だよ…」

紅葉「…紫苑何を見たんだろうね。」

巖上「…It is mysterious.」

霧切「まず、幽霊現象なんてこの世にないわ。」

最原「…」

星「昨日何があつたんだよ…」

蜜柑「それだけ怖かつたんですかねえ…」

星汰「初めてだよ、茉莉花の悲鳴聞いたの。」

キーボ「………」

山田「いやー…何を見たんでしょうかね…」

由李「ちよつと見たかつたかもお…」

私達、アツプルハウスのみんなはその墓を見て…

あれ?昨日は何したんだっけ?

私達は思い出せなかつた。

(非) 日常編5

それぞれの不安編

ザアアア…

木の葉の音がする。少し寒い風が吹く。

…真宮寺クンと入間チャンのことは忘れられない。

もう、失いたくなかったのに。

チャラ…

紫苑「…はー…どうしたら…」

カサ…

小泉「…紫苑ちゃん。」

紫苑「！小泉さん…」

小泉「…紫苑ちゃんって一体どういう人生送ってきたのかな…って思ってた聞きに来たの。」

紫苑「…小泉さんは？」

小泉「私は…友達に裏切られた。サトウって子なんだけど…仲が良くてさ、いつも一

緒だったんだ。けれど……」

ある日、濡衣を被せられたの。自分のものを盗んだ、盗んだって。

紫苑「……ひどいっ……！」

小泉「……だから、私は笑顔が消えたの。クラス全体から虐められたからね。」

紫苑「……そいつ、殺したいっ……！」

小泉「……だから、少しだけ聞きたいんだ。同じ仲間として。」

紫苑「……私は……」

私は、あの有名女子校の天蘭女学院高等学校の風紀委員長だったの。

毎日友達もいて、オシヤレだったからモテたしね……

けれど……けれど、一気に地獄に転落したの。

それは、「私が殺し屋」だったことがバレた。誰も見てなかったはずなのになぜか知って……

そして友達からは「裏切り者だ、死んだらいいのに」とか言われて……

先生からは指導と風紀委員長剥奪されて……もう散々。毎日が嫌になった。

そんなある日に、電車に乗っていたら事故が起きて今のみんなに出会えた。

紫苑「だから…私はシロからクロに落ちちゃったってこと。」

小泉「…怖いね、なんか…私よりも酷いよね…」

紫苑「…殺し屋しなきゃよかったかなって…思ってたけど、左右田とか、小泉さんと
か、今のメンバーとか…出会えてうれしかった。なのに…」

小泉「…ロシアイがあつた、よね？」

紫苑「うんっ…嫌だよ…もう、失いたくなかったのにつ…」

全て、失った私だからこそわかるんだ。怖くて、暗くて…もう嫌になった。

これ以上、ロシアイをしてほしくないんだよ。

紫苑「そうですね？小泉さん。」

小泉「うん。私だっと思うよ。」

紫苑「…ここが私が心を開ける場所だよ。凄く…落ち着くしっ…」

ポロ…ポロ…

紫苑「…うっ…なんで…なんで…」

小泉「紫苑ちゃん…」

ギョッ

小泉「怖くないよ。私達がいるから。」

紫苑「…うんっ…ありがとう…小泉さんっ…」

―紅葉―

紅葉「…先生…」

十神（兄）「いつまでメソメソしているつもりだ。」

紅葉「！十神っ…」

十神（兄）「…死んだ人間は返ってこないぞ。どれだけ悲しんでもな…辛いのは辛い。わかるだろう？烏岳。」

紅葉「…先生の何がわかるの?!あの、明るくて優しい先生が人を殺すわけないんだよっ!信じられないんだ…よ…」

十神（兄）「…それはお前の偏見だ。あいつは恋人、弟子を裏切ってまで殺人をしたんだ。風紀委員失格だな。」

ガンツ!

紅葉「…さいってい…風紀委員失格…って…罵倒してるの?!ねえ!」

十神（兄）「…勝手にしろ。だけどな、お前のことを本当に弟子と想ってたのか考えて行動しろ。いいな。」

バタン

紅葉「…やっぱり、十神って最低…先生、どうしたらいいの…？」
私は、石丸先生の血塗られた制服を持って、泣き崩れた。

―鳴花―

鳴花「…」

王馬「やっぱり、ここにいた、着物ちゃん。」

百田「おう、鳴花。」

鳴花「…ねえ、なんで人って切ないの？」

王馬「んー…どうなんだろうね。オレはホストくんの時が一番興奮したなあ。」

百田「お前は感覚がずれてんだよ…鳴花、もしかして…」

鳴花「…アンジーちゃん、魔姫ちゃん…ゴン太くん…人間ちゃん…是清くん…が死ん

じやったから…怖くて…さ。」

王馬「もー、心配しないでよ！オレは人なんて殺さないから！」

百田「…はー…鳴花、心配すんな、俺が…」

王馬「守るから♡でしょ？」

百田「お前っ！いい加減にしろよ！」

王馬「キヤー！こわーい！」

鳴花 「…ふっ…あははは…ありがとう。」

王馬 「気にさないですよ！」

百田 「そうだな。」

東条 「藍染さん、王馬くん、百田くん。そろそろ戻りなさい。」

鳴花 「あ、はい。」

王馬 「あーあ、なんか楽しいことないかなあ…」

百田 「あつちよりは楽しくねえからな。けれど我慢しろよ。」

この二人が私を勇気づけてくれる。

私はこの二人に助けられた。運命も、人生の道も。

だから、今度は…

そう誓った私は夕方を歩いた。

終

遊戯施設編

―田中眼蛇夢 部屋―

ガンガン

田中「…なんだ、雑種。」

左右田「…田中、お前にお願ひがある。」

田中「…は？」

紫苑「…おっそいなあ…」

くくく ピッ

紫苑「…もしもし…」

百田「お！紫苑先輩！左右田先輩と田中先輩来ましたか？」

紫苑「…うん。待つてるけど来ないよ…」

百田「そうすか…」

紫苑「…もしかして、死んでないよね…」

百田「…嫌なことすか…」

紫苑「…私、あの二人がいないとっ…」

夢野「んあ？どうしたんじや？」

茶柱「何があつたんですか!？」

百田「ちよっ…お前ら、少し黙ってる…」

紫苑「…大丈夫、もうすぐ来るかも。」

百田「…なんかあつたら言つてくださいよ。」

ピッ

紫苑「…左右田…田中…」

左右田「わりー、わりー！待たした！」

田中「すまなかつた！」

紫苑「！二人ともっ…！」

左右田「ごめんな、ゲームセンター行く予定なのにさ忘れてたんだよ…」

田中「申し訳なかつた。何か責任を…」

紫苑「いいよ…生きてただけで嬉しいよ…（小声）」

左右田「ん？なんか言つたか？」

紫苑「ううん。行こっ。」

ーモノクマゲームセンター
ウイーン…ガシャガシャ…

紫苑「久々かも…」

田中「初めてだな…」

左右田「お…あれは…」

ピロピロ…テレテレテツテツテ！

七海「…よし、クリア。」

紫苑「七海ちゃんだ…」

七海「…あ、紫苑さんに左右田くん…田中くん…」

左右田「よつ、うお…すげえな、レベル10クリアか…」

七海「まあね。こんなの余裕だから。」

紫苑「余裕って…」

七海「…三人は遊びに？」

左右田「まあな。三人で、少し話したくてよ。」

七海「…楽しんでね。」

紫苑「ありがとう。」

「モノミカフエー

カチャ…

紫苑「…で、話って？」

左右田「…紫苑、もし今俺たちが死んだらどうする。」

紫苑「…え？」

田中「…紫苑はどう対応する。」

紫苑「わ…私は…少し悲しいけど…」

左右田「俺らよりも事件かよ。」

紫苑「…え？」

左右田「…無理すんな、本当は悲しくて辛いんだろ？」

田中「…そういうときもあるだろう。」

紫苑「…な…なんで…」

左右田「俺、お前が事件解決してる理由がわかったんだよ。」

田中「…紫苑よ。辛いなら泣けばいい。笑いたいときは笑えばいい。」

紫苑「…」

左右田「…ただ、辛いのを我慢してまで、物にあたるな。確かに犯人が憎いかもしれねえ。けどな、お前はお前らしく生きてみるよ。そんな紫苑が俺は一番好きだぜ。」

紫苑「…部屋…覗いたの？」

左右田「見えた。お前の部屋訪問したときな。」

紫苑「…でも、私は…」

田中「…紫女よ、そんな態度でいるといつかは殺されるぞ。過去の被害者のようにな。」

紫苑「…!」

左右田「…田中はお前が来る前に一度コロナアイあつたんだよ。その時のクロだ。」

紫苑「え…」

左右田「式大さんを殺してな。そんな時に言つてたのがな…」

「ただ死ぬのを待つだけの生など…そこに一体どんな意味がある?」

左右田「…俺、今になってわかつてよ。だから、お前が来たとき俺たちはお前にクロになつてもほしくねえし、お前が殺されるのも嫌なんだよ。」

田中「俺様もその後地獄に落ちたとき、『もうクロになどならん。誰かを助けるために生きる。』と思つてな。」

紫苑「田中…左右田…」

左右田「…だからお前には一日一日を大切に生きてほしいんだよ。俺たちはそれをお前に願つてる。」

紫苑「…ありがとうっ…」

嗚呼、今まで生きててよかったかもしれない。

泣きたくないのに泣きたくなる。

しかし、この後史上最悪の殺人事件が起こるのを私はまだ、知らなかった…

終

chapter 6 血のチエックメイト

捜査編

1PM 22:00 モノミタウンホテル

ザーーー…

紫苑「…降られたね…」

左右田「最悪だ。」

田中「まっ…まあ、このくらい大したことは…」

紫苑「めつつちや動揺してますけど？」

白銀「あれ？紫苑先輩に左右田先輩、田中先輩じゃないですか！」

七海「また会ったね。」

天海「雨に降られたんっすか？」

紫左眼「…はい。」

ブオオオ…

白銀「めつつちやさらさらしてますね！」

紫苑 「…そう？なんかありがとう…」

白銀 「今日、雨って言ってなかったのになあ…」

紫苑 「…他に誰がいるの？」

白銀 「えつと…」

私と紫苑先輩、左右田先輩、田中先輩、七海先輩、天海くん、百田くん、夢野さん、茶柱さん、戦刃先輩、王馬くん、澤田先輩、大神先輩、式大先輩、東条さん、藍染さんですかね。

紫苑 「…へえ…」

白銀 「あれ、それって…」

紫苑 「…アイランドに居たとき、小泉ちゃんが撮ってくれたの。」

まだ仲良くないとき、この二人が声掛けてくれたから…なんか勇氣出てさ。嬉しかったなあ…

紫苑 「…ふふっ…」

白銀 「仲いいんですね、いいじゃないですか！」

ビービービービー！

モノクマ「只今、大雨のせいで川が増水しているため、向こう側に渡る橋を閉鎖します！」

白銀「え?! 帰れないの?!」

紫苑「そんな…!」

ーラウンジー

王馬「いやー…してやられたね★」

百田「してやられたね★じゃねえだろ。」

左右田「まずいな…このままじゃ、あつちで殺人事件があつたら困るよな…」

七海「仕方ないよね。」

鳴花「…とりあえず、落ち着いて行動しましょう。」

東条「藍染さんの言うとおりよ。殺人事件なんて起こらないように慎重に行動しましょうね。」

戦刃「…紫苑さん。」

紫苑「…戦刃さん…」

戦刃「…私、盾子ちゃん心配なんだけど…」

紫苑「…仕方がないよね、川の増水なんだから。」

戦刃「…そうよね。ありがとう、おやすみ。」

紫苑「うん。おやすみなさい。」

―紫苑 部屋―

バタン…

紫苑「…」

もう、寝よう。明日帰ればいいのにな…

―翌朝―

紫苑「んん…おはよう…」

夢野「！紫苑！早く来るんじゃ！」

紫苑「何…?!」

茶柱「戦刃先輩が、し…死にました！」

紫苑「…え？」

―モノミタウンホテル ラウンジ―

バンツ…！

紫苑「…！戦刃さん…！」

そこに居たのはホテルの全員と死体となった戦刃さん…

紫苑「な…なんで…昨日まで話してたのにつ…」

左右田「…これ、殺人事件なのか？」

大神「それしか考えられないだろう。」

澤田「め…目の前で殺されたんつす。」

紫苑「…目の前?!」

鳴花「そうなんです。目の前で…」

戦刃先輩に矢みたいなのが刺さって…その場で倒れて…

百田「…明らかに殺人事件なんだよ…」

王馬「だから…」

このホテルにいた今いる全員が犯人なんだよ。

王馬「それしか考えられないよね★!」

夢野「な…なぜじゃ、なぜそう考えるんじや!」

紫苑「夢野さん。確かにこのホテルは小泉さんとかいる別館とは昨日増水したから橋

が止まってる。そして、今も。」

白銀「と…とりあえず、捜査しませんか? 犯人を早く見つけるために…」

紫苑「そうよね。捜査始めよっか。」

― 捜査開始 ―

紫苑 「…と、いうことで、今から戦刃むくろ殺人事件の捜査するよ。」

百田 「うー…怖えよ…」

茶柱 「びびってても何も始まりませんよっ！」

鳴花 「…まずは戦刃先輩は矢みたいなのが刺さって死んだ…だから刺殺、となりますね。」

白銀 「そうだね。でも、なんでこんなのがホテルにあるんだろ。」

田中 「確か、倉庫にあったぞ。」

紫苑 「あるの？」

田中 「こういうのが沢山あったぞ。不思議な感覚だったな。」

左右田 「じゃあよ…これ、吊り下げるの難しくね？」

滝田 「これ、捜査できるっすよ？ほら。」

ウイーン…ガシャン

天海 「まだあつたんっすか…」

王馬 「俺たちを殺そーとしてたんだね。」

東条 「なら、証拠とかあるのかしら。」

紫苑 「犯人の…」

式大 「これはなんじゃあ？」

紫苑「え？」

それは何かのボタン。なんだろう……

紫苑「……？」

王馬「？何かな？これ。」

百田「それ……俺のじゃねえか！なんであんだよ！」

紫苑「……百田さんの……もしかして、服？」

百田「てか服のボタンだよ！ねえと思ったらこんなところにあつたのかよ……」

紫苑「……！わかった。これですべてが繋がった。」

― 捜査 終 ―

学級裁判前編

！学級裁判 開廷！

紫苑「…今回は…モノクマじゃないの？」

モノミ「何故かわたたちが連れてこられたのでちゅよ…」

紫苑「…お疲れ様。とりあえず、見るだけでいいから、ね？」

モノミ「紫苑さんはやさちいですね…」

紫苑「…ということ、やっていくけどいい？」

百田「オツケーだ。よろしく頼むぜ。紫苑先輩。」

紫苑「じゃあ、この事件の被害者は戦刃むくろ。超高校級の軍人…」

白銀「昨日は紫苑先輩と話してたのですか？」

紫苑「え、うん…」

白銀「誰か目撃とか…」

紫苑「…あ、大神さんが見てるかも。通り過ぎたから。」

大神「確かに話していた。」

白銀「じゃあ…その後見てる…って人いない？」

天海「あ、俺見てるっすよ。」

紫苑「ほんと?!」

天海「なんか…誰かと話してたっす…暗闇の中で…」

紫苑「…え?」

天海「んー…でも確かに誰かと話してたんっすよね…」

紫苑「そっかあ…わからなかつたんだね…」

鳴花「…こういう可能性は?まず、戦刃先輩は何者かに呼ばれ、その相手と揉め合いになり、殺した。というのは…」

☒反論!☒

東条「少しお待ちなさい」

東条「藍染さん、その考えもよろしいけど…揉め合いになってというのはおかしいんじゃないかしら。」

鳴花「…え?」

田中「な…何がおかしいのだ…」

東条「戦刃さん…は、槍で殺されたはずよね?私達の前…で。」

唯吹「確かにそーっすね！すげえっす！東条さん！」

東条「だから…揉め合いになるっていうのはないと思うわ。」

紫苑「え…じゃあ…」

東条「…その場にいた人間…犯人は元々殺す計画なのよ。」

茶柱「えええええ?!計画だったんですか?!」

七海「計画…ってことは、そもそも知っていた。ってことだよね。」

東条「そうよ。だから…」

☒反論!☒

鳴花「その思考、斬らして頂きます！」

鳴花「…そもそも知っていた?初対面なのに?」

百田「確かにそうだな、俺達初対面だよな…」

鳴花「…東条さん、揉め合いになるっていうのはないけど…犯人は初見の頃、犯人はターゲットを探していたのでは?」

東条「…!そうね、気づかなかったわ…」

鳴花「だから…誰にでもあり得るよね?…戦刃先輩を殺せるのは。」

左右田「はあ?!なんで俺たちが疑われなきやなんねえんだよ!」

茶柱「そうですね!藍染さん!」

紫苑「…それは、藍染ちゃんでもあり得るよね?」

鳴花「…ええ。」

大神「これはまた…ふりだしに戻るな…」

唯吹「んがーっ!なーんで犯人がわかんないんっすかー?!」

紫苑「…待って?唯吹ちゃん、槍を操作できるのなんでできたの?」

唯吹「え?」

紫苑「だって…私達だって知らなかったのに…」

唯吹「…そ、そりゃあ…えーっと…」

王馬「はーやく言っちゃいなよ★」

唯吹「…夜中回ってたんっす…」

紫苑「え?」

唯吹「唯吹、練習してたんっすけど…」

夜中に練習が終わったついでにこのホテル内を回ろーかなって思ってた…そしたら

…何かを引きづる音を聞いて…

唯吹「それで、ついていってみると…」

犯人らしき人がそれを操作してて…その瞬間…グサツ！っていうにぶーい音を聞いたんつす…

唯吹「言えなくてすみませんつす…」

紫苑「…操作してるのを見てわかったの？」

唯吹「ええ…まあ…」

左右田「んだよ…」

紫苑「…引きづる？って言ったよね…」

唯吹「え、うん…」

紫苑「…ボタン…機械…引きづる音…全て繋がったかもしれない！」

―前編終―

学級裁判後編

?クライマックス推理?

紫苑「まず、犯人はこの状況を使って狙いが来るようにした、というよりも来させた。そう、モノクマを使って…ね。そして、被害者はそれも知らずにこのことやって来て…大雨のせいで私たち3人が来たのを見て…タイミングを見た。そして、夜中に呼び出して…マネキンを試しに槍で殺すのを練習してて、それを濱田ちゃんは見ていた。そして、その翌朝。被害者は1人で呼び出されて…その瞬間殺られたってこと。」

紫苑「だから、犯人は貴方…超高校級の総統、王馬小吉さん!」

!! complete !!

王馬「…やだなく。俺が人を殺すわけないでしょ? 紫苑ちゃん。」

紫苑「だって、貴方にしかつ…この犯行はできない!」

王馬「じゃあ、俺と一緒にいた着物ちゃんは?」

紫苑「…えっ?」

東条「そうなの? 藍染さん。」

鳴花「…確かに一緒にいた。私は王馬さんと一緒にいたよ。」

紫苑「えっ?!」

七海「うーん…:ほんとかなあ…」

「溍田「で、でもでもでもでもでも!確かに小吉くんつしたよ?!見た目ちっさいし!」
王馬「ふーん、それって、溍田ちゃんが嘘ついてるかもしれないよね?俺、嘘ついてるのわかるし。」

溍田「そうっすよ!信じてくださいって!」

左右田「俺は、溍田を信じる…:けど、紫苑はどうすんだよ?」

紫苑「わ、私は溍田ちゃんだよ…」

七海「私も…:かな。」

式大「わしもじゃあ!」

田中「俺様もだ。」

天海「俺もっす。王馬くん、信じれねえっす。」

夢野「うちは王馬を信じる!」

茶柱「私もです!」

大神「我也だ。」

鳴花「私もです。」

白銀「私は…:王馬くんを信じるよ。」

百田「俺は濤田先輩を信じるぜ！」

東条「私は王馬くんを信じるわ。」

モノミ「えつと…これは…」

モノクマ「真つ二つだね！」

紫苑「も、モノクマ?! あんた、あつちに…」

モノクマ「あれ? こつちにいたよ?’

左右田「嘘つくなつて!’

紫苑「…ん? 嘘?’

嘘? これつて、どつちかが嘘をついてるつてことだよね? 王馬くんか、濤田ちゃんか

…

紫苑「モノクマ、どうすればいい?’

モノクマ「これは議論スクラムだね! 真つ二つだし!’

紫苑「え? 議論…スクラム?’

天海「ああ…あれつすか…」

モノクマ「まあ、行つてみたらわかるから! やつてみよう!’

◎議論スクラム◎

START!

鳴花「王馬さんっていう証拠はあるの?!」

紫苑「濤田ちゃん!」

濤田「そりやあ!あの、特徴的なスカーフが証拠つすよ!」

夢野「じゃあ、どうやってあの重い槍を何個も運んだんじゃ!」

紫苑「天海くん!」

天海「クロが二人いたってことも有り得るつすよ。」

茶柱「では、その根拠はなんですか?!」

紫苑「七海ちゃん!」

七海「きつと、恨みとかじゃなくて外に出たかったって言う理由とかじゃないかな。」

白銀「でも、王馬くんがそんな理由で殺すかな?」

紫苑「左右田!」

左右田「そりやあ、こんな環境だと顔には出なくても思ってたて、殺すことあるだろ!」

王馬「俺はそんな嘘なんかつかないけどな。」

紫苑「私が!」

紫苑「王馬くんは嘘をよくつくし、濤田ちゃんはついたことないから!それはないよ

!」

K L U T C H M i n d ! (○○○△△□□□)

紫苑、左右田、田中、天海、式大、七海、百田、濔田「これが私（俺）たちの答えだ！」

!! B r e a k !!

紫苑「…鳴花ちゃん、そろそろ本当のこと話してくれる？」

鳴花「貴方なんかにはわかるわけないっ！私は絶対に言わないっ！」

左右田「いや、バレてるんだしそろそろ話せよ…」

濔田「…まさか、鳴花ちゃんがクロなんっすか？」

鳴花「…は？」

白銀「えっ？」

鳴花「協力しただけだけど？それが何か？」

田中「やはり、嘘の総統が犯人か…」

王馬「あーあ、バレちゃったか。ざーんねん。」

鳴花「…私は王馬さんが犯人だっと思って…」

王馬「あれ？裏切ったくせに？」

鳴花「へっ？」

王馬「だって、さっき今裏切ったじゃん。協力しただけ、ってね。」

鳴花「…っ！」

王馬「いいよ、裏切っても。俺は俺なんだし。ま、百田くんよろしくねー。」

百田「ちよ、ちよっと待てよ！」

王馬「はー、楽しかったー。紫苑ちゃん、ありがとうね。俺の遊戯に付き合ってくれて。」

紫苑「…ゆ、遊戯…？」

モノクマ「では、始めます。イツオオキターイム！」

『オウマコキチさんがクロに決まりました。オシオキを開始します。』

バタン！

紫苑「ゆ、遊戯って…何？」

左右田「どーせ、アイツのままごとにつき合わされたんだろうな。」

鳴花「…」

白銀「…鳴花ちゃん、元気だして…」

鳴花「…ほっといて。」

バタン

紫苑「…え？」

七海「シヨックだったんじゃないかな…」

紫苑「…」

！学級裁判閉廷！